



049-T023
1200500724523

049
T023



始



2-3744

お



049
T023

農學
博士

東
郷

實
著

三等に乗る

東京 富山房 發兌



~~47-25~~

序に代へて

私が政界に身を投じて以來、正に十年、この間折に觸れ時に應じて、物した隨感隨想は、可なり多くの數に達して居ります。然るに最近各方面から、上梓の勸めもあり、遂に本書の誕生を見ることになりました。

私は無論文士ではありません。従つて本書は素人の書いた隨筆の範圍を出でないのであります。併しそれでも、私の全精神は、どこかに深く打ち込んであるつもりであります。幸に、大方諸君子の一讀を仰ぎ得ることが出来ましたならば、私の光榮これに過ぐるものはありません。

昭和九年十一月三日

明治の佳節を祝しつゝ

東郷

實識

讀書の如うな安價な愉快はない。またこの如うに永續する快樂もない。

モ ン タ ー グ 女 史

階級位置を問はず、凡て書物を好ぶものは、人間の中で最も富み、且つ幸福な人だ。

ジエー・エー・ラングフォード

三等に乗りて

目 次

陣笠の群に入りて……………	一
展望車と機關車……………	五
仁王の草鞋と植民政策……………	八
三等に乗りて……………	三
小刀細工から解放せよ……………	六
子兎の悲しい最期……………	三
雨の飯盛山から……………	六
花魁の力……………	三
力一杯……………	七
法律を超越せよ……………	四

シルクハット……………	四四
模倣から創造へ……………	四九
ボイス、ビー、アンビシヤス！……………	五三
波を見る先生……………	五九
獨逸の女教師と語る……………	六五
新政黨の樹立へ……………	七〇
一匹の蠅……………	七五
白髪染……………	八一
法律と人格……………	八八
秋空に富士を眺めつゝ……………	九二
共樂亭……………	九七
日本は何處へ往く……………	一〇三
一等國……………	一一〇

彰化一年有半の思出……………	二六
二つの力……………	二九
民族的藝術の殿堂……………	三五
義務……………	三九
先づその源を清めよ……………	三三
精神文化建設の爲に……………	三八
歩きながら……………	五〇
祖國を救ふの途……………	五六
世界的偉人を造れ……………	六三
政界革新の爲に……………	七一
農村の青年とその娯樂修養……………	七七
財部から東京まで……………	八六
理想なき政治……………	九〇

四

大人格南洲先生を憶ふ……………一九三

佐渡ヶ島から……………二〇二

忘れえぬ姉……………二〇七

二つの思ひ出……………二〇九

好親却て破れん……………二二六

倫敦の思ひ出……………二三三

義人宗吾を憶ふ……………二三七

心と心との問題……………二三一

政治の話……………二三七

雪降る日の小鳥……………二四三

一點の曇……………二四六

血の燃える病氣……………二五四

稻空しく稔る……………二五八

ドロテア……………二六四

先づこの三點から……………二七三

その根は深く祖國の土に……………二七七

帝制華かなりし日……………二八七

グレイプ・フルーツ……………二九四

文字なき者の教訓……………三〇〇

臺南に於ける或日の思出……………三〇三

友邦たるの心……………三〇七

二人の藝者……………三一五

三十年前の思出……………三二二

馬鹿をみた話……………三二九

僕のステツキ……………三三二

四人の『東郷實』……………三四六

五

陣笠の群に入りて



「平靜なる官海に船を乗り捨て、波瀾多き政界に駒を進めた」等と云へば、如何にもえら
まうだが、その實十八年間の腰辨生活に愛想をつかし、改めて陣笠の仲間入りをしたと云
ふに過ぎない。

その陣笠の仲間入りをして正に滿二年、三度議會の經驗も味つて見た。

僕の立候補に就て、友人先輩の或一部の人達は、眞面目に、親切に反對の意志を表明し
た。「純眞な役人生活をしたものが、あの腐敗し切つた黨人の仲間入をするのは、丁度羊
が狼の群に投ずる如うなものだ」と云ふのが、その人達の反對理由であつた。

併し僕はさうとは思はなかつた。よし又さうであるとしたならば、我國の政治をこのま
ま狼の群に任かして置く譯には參らぬ。果して世人の考へてゐる如うに、我國の政界が腐

敗墮落の極に達してゐるものであつたならば、之が浄化は國民自らその任に當らねばならぬ筈だ。政界の浄化、若しそれが今日の急務なりとしたならば、外面から論議して見たところが、内面から浄化に努むるものが輩出しない限り、到底その目的の達成は出来ぬ。

僕はかう考へて、遂に政界に飛び込んでしまつた。飛び込んだ以上は僕の理想とする『人格政治』の確立に向つて邁進するのみである。而も黨界は決して狼の群のみに依て獨占されてはゐかつた。僕等と志を同うする多くの憂國者が、我々陣笠の群には可なり多いから愉快だ。

過る第五十一議會の半面は實に醜惡なる裏面の曝露であつた。併し之が黄金政治及陰謀政治没落の最後の幕であると同時に、人格政治確立の第一歩であるを思ふとき、吾人は一種の痛快を禁じ得ない。

『政治は力也』と云はれてゐる。成る程政治には力が必要である。力のない政治が何の役に立たうぞ。併し此『力』に大變な誤解がある。政治に必要な力は『金の力』にあらず、又『策の力』でもない。

無論政治には金が必要だ。併し一も金、二も金、三も金と云つた様な今日の實狀では、到底公明な政治は出来ない。不淨の金を多く掻き集めるのが天下取りの近途であるが如く考へ、『金の力』を過信する如うなことは舊式政治家の爲すことで、眞に新しき日本を建設せんとする新進政治家の爲すべきことではない。黄金萬能の政治を速に葬り去るのは、我我陣笠連の一大任務ではないか。

政治には時に策も必要だ。併し明けても暮れても小刀細工のみに没頭し、それ以外には何物もない様な陰謀政治家は實に國家を破滅に導くものである。『策の力』は政治を陰鬱ならしむる以外に何等の効果がない。この陰謀政治を速に退治し盡すのも、又我々陣笠連當然の任務なりと云はねばならぬ。

政治に必要なのは金の力、策の力にあらずして、實に偉大なる『人格の力』である。今日の政界を浄化し、今日の政治を倫理化し得るものは單に偉大なる『人格の力』あるのみだ。人格政治の確立はこの偉大なる力によつてのみ實現し得らるゝのである。

自ら好んで陣笠の群に投じた僕の眼から觀れば、必ずしも黨界は狼の群のみに依て獨占

されてはゐない。そこには力強い人格の所有者も決して少しとしない。我國の議院政治が眞にその機能を十分に發揮し得るの時は、黄金の光が『人格の光』にその地位を譲るの日である。

今や黄金政治の没落を弔ふ夕暮の鐘が頻りに舊式政治家の手に依つて搗き鳴されてゐる。而して我々陣笠の群に依つて打ち鳴された『人格政治』確立の鐘は、更に／＼曉の空に高く鳴り響いてゐる。茲に於てか自分は陣笠の群に入りしことに對し特に幸福を感じずにはゐられない。

—大正一五・六—

展望車と機關車

九州地方の遊説を終へての歸るさ、上り特急の展望車最後の安樂椅子に凭れながら、靜かに外を眺めて見た。無論汽車の進行とは反對の方向に自分の顔は向いてゐる。

自分達の乗つて來たレールを中心に、様々の風景が心持ちよく、次から次に展開されて來る。恰度活動寫眞を觀てゐる如うな氣持だ。併し、時々刻々變つて行くこの美しい風景も、所詮は自分の乗つて來たレールを中心としての範圍に限られてゐる。このレールを離れてはそこに何物をも見出し得ない。而もその風景の總ては自分が通過して來た後のものばかりであつて、之れから行かんとする前面の風光とは何等の交渉もない。

並行した二本のレールが段々先細りになる、それに連れて兩側の風景が同じく先細りになつて見える。而もそれが聽ては視線から遠ざかつて見えなくなる。

自分は考へた。自分がかうして展望車の中から、自分の通つて來た後の風景を眺めながら楽しんでゐるのは、恰も功成り名遂げた老人が、安樂椅子に埋りながら、靜かに過去を追懷して、獨り悦に入つてゐると同様だ。過去の追憶、それは斷じて將來に生くべき青年の爲すべきことではない。過去を物語り、過去を自慢する様になると人間も既に下り坂だ。獨り人間ばかりでない、國家亦然りである。一時天下の覇權を握つてゐた、西班牙、葡萄牙も、今や三流四流の小弱國に成り下つた。彼等の誇とするところは、僅かに過去の歴史である。その歴史を物語る幾多の銅像や記念碑、それが彼等國民を慰むる唯一の寶物である。展望車の安樂椅子に腰を落しながら、自分達の通つて來た後の風光に見取れてゐるのが、彼等西班牙人であり、葡萄牙人である。

かう考へた時、自分はこの身が青年であることに氣が付いた。安閑として展望車の安樂椅子に過ぎ來し方の風光を眺め暮すべき身でないことに氣が付いた。自分は老人ではないぞ、自分は働くべき青年なんだ。かう氣が付いたとき、自分はこの列車の先頭に立つて働く機關車のことを思ひ出さずにはゐられなかつた。

總ての原動力となつて、この列車を自由に動かしてゐる機關車、そこには晝夜を分たず、自己の貴い使命に生きんとする健氣な機關手が乗り込んでゐる。その逞ましき両手に、しつかと握つたハンドル、彼の男らしい光ある眼は、一心不亂に進み行く前方を見詰めてゐる。彼の任務は過去を顧みすべく餘りに重大である。絶えずシヨウベルを動かして、原動力の調節に餘念なき彼等、そこにはこの列車の進退を自ら支配せりと云ふ誇以外、他に顧るべき何物をも有しない。

男らしい任務、青年らしい使命、それは機關車に乗るべきものゝ任務であり、使命である。『大日本帝國』と名付けた特急列車は、今や斯くの如き青年の奮起を熱望してゐる。吾々は展望車の安樂椅子に過去を夢みるが如き享樂主義の國民を絶対に排撃する。吾々は過去に生きずして、將來に生きねばならぬ。吾々國民の總てが、斯の如き青年の意氣に醒め、展望車を棄て、機關車に走り赴く時、そこに初めて我帝國が世界無比の最大特急列車たり得べき機運が到來するであらう。

仁王の草鞋と植民政策

或日或所で聞いた落語の中に次のやうな意味の一節があつた。

『浅草観音に御詣りをして見ると、仁王門のところ、仁王様が草鞋店を出して御座る。ところが、その草鞋が滅法界に大きいので、何年経つても買手が付かぬ。人間相手の商賣なら、ちつとは考へても見るがよい。伶俐なやうでも矢張り仁王様は仁王様だ。丁度それは「大男總身に智慧が廻りかね」といつた如うな姿だ。自分の足も人間の足も同じ大きさだと考へて御座るところに仁王の無邪氣さが伺はれる』

何でもないやうだが、一寸面白いことを云ふ男だと思つた。

何ん人の足も自分の足と同じ大きさだと考へてゐる人が世の中にはザラにある。かう云ふ人は何時でも自分丈けの心持で總ての事物を判断する。従つて他人の心持等は更に考へ

る様なことはしない。かう云つたやうな人が政治の局に當ると政治が常に専制に傾き、國民の不平不満を不絶買ふことになる。

然るに、日本人の一人々々が悉くこの缺點を持つてゐる。日本民族の特色であり、缺點であるところのものは『御國自慢』の念に強いと云ふことだ。その結果、日本人は獨り天狗の弊に陥つてゐる。而もこの缺點が植民地統治の上に遺憾なく暴露されてゐるから恐ろし。

日本人の植民政策は、自分達の心持丈けで總てが割り出されてゐる。植民政治の對象物たる植民地原住民族の心持等は殆ど考へられてゐない。そこに非常な缺陷を存するのである。

各民族には、それ／＼固有の民族精神のあることを忘れてはならぬ。之が植民政策決定の基礎的要素である。然るに我國の異民族統治策には、この大切な民族心理が殆ど考慮されてゐない。

自分丈で『善』なりと考へたことは、無條件で總ての民族にも『善』として受け容れら

るゝものなりと考へるところに大きな誤りがある。この考は丁度仁王様が自分の足と人間の足と同じ大きさだと考へ、自分の足に合わせて作った大きな草鞋を、人間にも履かせようと考へてゐると同じ筆法だ。

『同化政策』だの『母國延長主義』だのと云ふのは、つまり、この錯覺から歸納された一個の斷案であつて、これ程相手の心持を無視した行き方はあるものでない。

日本人の足に、しつくり合ふ様に出來た草鞋でも、之を朝鮮人なり、臺灣人なりに履かして、必ずしも、しつくり合ふものではない。現に朝鮮には朝鮮の草鞋があり、臺灣には臺灣の草鞋がある。又同じ日本人同士でも、足に大小があれば、それ〴〵草鞋の大きさを選擇しなくてはならぬ。況んや異つた民族には、それ〴〵民族特有の足の大きさがあらう。殊に無形の『心の足』に履かすべき草鞋に至つては、更に格段な考慮を必要とする。

日本人に適合した法律制度でも、そのまゝ之を植民地に持つて行つてよい譯のものではない。『法律制度』と云ふ草鞋は、先づ植民地原住民族の『心の足』の寸法を正確に測つて後、初めてその大きさを定むべきものだ。日本人の『心の足』に合ふからとて、無暗矢鱈

に寸法構はず、之を彼等に履かすべきものではない。仁王の草鞋は仁王様限りの御用品だ。我々は速に仁王の草鞋店を閉鎖し、買手の付く様な草鞋の製造に工夫を凝らし、新店の開業に取り掛らねばならぬ。斯くて我國の植民政策は、初めて圓滿な解決を見ることであらう。植民地統治上『仁王の草鞋主義』は僕の絶対に排斥するところである。

三等に乗りて

一一一

久しぶりに汽車の三等旅行を試み、三等ならではの味ふことの出来ない人間味を味はひ、更に色々の社会的實相を窺ひ得て最近にない心からのうれしさを感ずる。

鐵道省は本月の十五日から、汽車の發着時間に一大改正を行ふと同時に、一等車の連結を廢止した部分も少くないといふことだが、それはまことに結構なことだ。

回顧すれば、もう十六年も前のことである。伯林留學の當時獨逸のポーランド政策を實地に見學すべく、ウエスト・プロイセン地方に獨り旅をしたことがある。その際汽車に乗り合した一人のアメリカ人があつた。親の時代に移住したといふ獨逸種子のアメリカ人であることも、又彼が初めて獨逸に来て、今親類廻りをしてゐる最中であることも、彼の物語るところでよく判つた。ところがこの先生頻りに獨逸の惡口をたゞくから面白い。

「獨逸といふ國は實に怪しからぬ國だ。汽車に一等から四等までの階級が設けてある。而も四等になると、ろくすつば腰掛も置いてない。丸で人間を牛馬同様に取り扱つてゐる。こんな亂暴な國が、またと世界にあるだらうか」といつて盛んに獨逸の階級思想を非難し、更に「そこになるとわしの國……アメリカ……はこの世ながらの樂園だ。第一汽車には一等もなければ二等もない、一切平等、誰でも同じ階級だ」と盛んにお國自慢をきかしてくれた。

物は觀察の仕様で何とでも理窟がつく。汽車に四等のあるのは、考へやうによつては、世界無類の進んだ制度だともいへる。都會附近の農民が自分の作つた野菜や果實をかついだまゝ四等車に乗り込む。従つて荷物の上に腰をおろせるからベンチのない方が寧ろ便利だ。斯くて農民は仲介者の手を経ず、自ら自分の生産物を都市に運んで行つて、安く賣りながら、多くの利益を獲得するの便利がある。また都會の消費者は直接生産者から新鮮なものを、安く手に入れる利益があるのだ。これ程社會政策を加味した制度が他に多くあるだらうか。併しアメリカ人……獨逸種子のアメリカ人……には、それが如何にも不可思議

一一二

に見えるのだから面白い。

その翌年、自分は獨逸を引き上げてアメリカに渡つた。成程アメリカの汽車には等級の區別はない、併し賃金に比例して、いくらでも贅澤な列車がある。ローカル・カーとブルマン・カーの間には雲泥の相違がある。等級のないアメリカの汽車でも、金の多少で自分の好きな列車が自由に選擇出来るのだ。従つて實質に於ては、等級のあるのと何等變りはない。これでもアメリカ人は四民平等だと威張つてゐるからをかしい。

かう考へて見ると、汽車や汽船に等級制を採ることが別に悪いことでもなければ、等級を廢することが必ずしもよいことでもない。要は各人がそれ／＼その分に應じて、適當な等級なり、列車なりを取れば、それで事は足りる。形式等別に八ヶ間敷く詮議立てする必要は更でない筈だ。

ところが身分相應といふことが、兎もすれば亂れ勝になるのが世の常である。日本では親が金持であれば子までが金持の動作をする。親が立派な地位に在れば子供までが親の身分に相當するやうな態度を取る。これがそも／＼大きな間違ひだ。これが今日の學生等を

兎角贅澤ならしむる誘因の一を成してゐることを忘れてはならぬ。

自分は先年關西の或地方を旅行して、中學や女學校の生徒達が二等列車で通學してゐるのを目撃して、憂ふべき風潮なりと感じたことがある。あの邊一帶は金持の多いところだから、その子弟が汽車の二等に乗るのは當然だと考へる人もあるだらう。併しそれは大きな心得違ひだ。親が金持であらうがあるまいが、中學生は誰でも中學生であつて、その間區別はあり得ない。親の身分の上下によつて、女學生そのものに上下の區別がある筈のものではない。學生は學生らしく三等を選ぶべきである。親の身分によつて、二等にし、一等にすべきでない。

自分は先年伯林在留中、或日伯林大學の老教授シュモラー先生と地下鐵道の三等車に同車したことのあつたのを思ひ出さずにはゐられない。そればかりではない、學生は學生らしくするといふのが、獨逸邊での一般原則である。親の身分によつて子供までも左右されないところに、我等の學ぶべき妙味を多分に藏するではないか。

身分不相應な贅澤は絶対に排撃しなくてはならぬ。享樂主義は享樂そのものが悪いので

はなく、またこれに費す金が惜しいのでもない。併しそれによつて導かるゝ人心の腐敗と人格の墮落とが恐ろしいのだ。

自分は常にかういふ方針の下に子供達を取り扱つてゐる。今回久しぶりで長男……中學二年生……と長女……尋常五年生……とを展墓を兼ね、老父母を訪ねるべく郷里に歸すことにした。併し二人だけを歸すには尙ほ不安を感ずるので、自分が同行することにした。子供が主であつて自分は副である。子供達が三等汽車で往復するのは當然である。さうなると如何に一等パスの所有者であつても、随行格の自分が一等に納まつてゐる譯には行かぬ。即ち子供達と共に三等の旅を續けることにした。

一等パスの所有者たる自分は、近頃比較的樂な旅行が出来る。併しそこには人間味に缺けてゐる様な一種の淋しさを常に感じてゐた。然るに今回子供達に隨行して、東京鹿兒島間を三等列車で往復する機會を得たのは、確かに天の恵みであつたと考へる。人間味たつぷりな三等の旅、これを味ひ得たことの幸福を感謝せずにはゐられない。

自分達の仲間が特權を利用して常に一等を利用することが善いか悪いか、そんなことを彼は論議する必要はない。併し政治は常に最大多數者、否、國民全體の最大幸福を目標とすべきである。それには三等の味を時折味つて見る必要があるではなからうか。そこに味い得た人間味と社會味とは金に換へ難い貴さである。

斯くて自分は二人の子供達に感謝しつゝ、今三等の旅を東京へと續けてゐるのだ。

——大正一五・八・二九、三等特急にて——

小刀細工から解放せよ

我國の小學校では兒童に手工を授けてゐる。併し、どここの學校の手工でもその作品は殆んど實用に堪へないもののみである。

或時或小學校の或先生に手工の目的を質して見た。すると彼は『手工の主たる目的は、作品の實用的成果を求めんとするにあらずして、寧ろ兒童の注意力集中の訓練を爲すに在るのだ』と答へた。

兒童の注意力養成がその主たる目的だとするならば、成程、その作品は實用的ならずして可なりと云ふ議論も立ち得る。併し一步進んで、實用的作品を完成せしむることに努力したならば、より以上、その注意力集中の目的をも達成することが出来ようではないか。

自分は先年比律賓の各學校教育を視察したことがある。英語と手工とに全力を注いでゐる比島の各學校は、眞剣に手工教育の實績を擧げること努力してゐる。而もその作品は立派な實用品だ。小學校の小さな兒童の手に成つた手工品が、既に立派な美術的實用品である。殊にアバカ製のバスケットや竹細工や、レース等は、實に實用品として美事な出来栄である。此位徹底するに於て、初めて手工教育にも意義がある。

注意力の養成が主眼であるなら『糊』と『鋏』と、さうして『小刀』とを以てする様な手工教育は全廢するのが賢明だ。注意力の養成には他にいくらかも有效な手段方法がある筈だ。

糊と鋏の使ひ方を教へられた小國民、更に小刀細工を授けられた小國民、之れが社會に出でゝは學者ともなり、政治家ともなる。

徒に歐米の學説を祖述することのみが、自分の使命でもあるかの如く心得、上手に糊と鋏とを使つて其の日暮をする學者があるかと思ふと、盛に小刀細工を弄するのが彼等の本分であるかの如く考へ、巧みに陰謀政治を企てゝは、政治を墮落に導くところの政治家の多いのには一驚を禁じ得ない。

三つ子の魂百迄とも云ふが、恐ろしいのは教育の結果だ。實用を目的としない手工教育が無益に終る丈けならまだしも、それが恐るべき影響を國民精神の上に及ぼすとしたならば、速に之が改廢に取りかゝらねばならぬ。

グラッドストーンは大宰相の激務に在る場合と雖、日曜日には必ず、ハワーデンの別墅に人を避け、自然の大氣を吸ひながら、斧を振つて薪割りをやつたものだ。嘗て在野當時勅使はここに彼を訪ね、組閣の大命を傳へた。彼は豫定の日課たる薪割を終へたる後、靜に身仕度を整へ、初めて参内の上、大命を拜受したと云ふ美談もある。そこいらの自稱大政治家達が、大命降下を、今か今かとシビレを切らして待ちわびてゐるのは、そも一段違ひだ。

彼の政治は必ずしも成功のみではなかつた。併し、彼が今日迄世界の大政治家として讃美せらるゝ所以のものは、全く彼の偉大なる人格の然らしむるところである。彼の政治には寸毫も小刀細工の跡がない。彼の政治は終始一貫斧を振ふて薪を割るの概があつた。そこに大政治家の風格を見出し得るではないか。現在日本の要求するところは、恰も彼の如き風格を有する大政治家の出現である。

糊と鋏と、さうして小刀から彼等小國民を速に解放せよ。而して彼等を大自然の眞只中に徒手空拳のまゝ、靜かに立たしめよ。斯くて偉大なる注意力は自から修得せられよう。更に彼等に『鋏』を振ふて勞働に親しむの訓練を與へよ。斯くて氣宇宏大にして、剛健なる風格は自から養成せられよう。

そこで初めて、糊と鋏とを頼りにしない獨立的な大學者も出ようし、小刀細工を棄てゝ『大鋏』を振ふ様な大政治家も出よう。眞に祖國を救ふところのものは斯の如き學者であり、政治家である。

子兎の悲しい最期

先年臺北に官舎住ひをしたゐた頃の出来事である。或年の夏、子供達が御隣から眞白な子兎を一匹貰つて来て、頻りに可愛がつてゐた。

時々、狭い小屋から廣い前庭に解放しては喜んでゐた。殊に月のよい時分になると、解放された子兎は、夜遅くまで、庭中をビョン／＼跳廻りながら、子供達と一しよに遊び暮すのが普通であつた。

狭い小屋から廣い庭への解放、それは子供達の弱き者に對する同情の現れであつた。然るに或晩のこと、此同情は却つて子兎に禍するの時が來た。

それは月の美しい晩のことであつた。例の通り解放された子兎は、長い耳をふりたてながら、月下の庭をうれしげに跳廻つてゐた。そこには何等の不安もなく、彼にとつては全

くこの世ながらの樂園であつた。然るに間もなく、この平和な樂園は思ひがけなき曲者の襲撃によつて全く破壊されてしまつた。曲者とはY君の飼犬『赤』であつた。斯くて子兎は『赤』の爲めに無慘な最期を遂げてしまつた。

此急變に遭遇して、驚いたのは子供達であつた。門に近く放棄されてあつた子兎の眞白な死骸は、鮮血に赤く染められてゐる。さうして死骸を庭先に運んで來た子供達の頬には熱い同情の涙が流れてゐた。

聽て死骸は子供達の手によつて、眞赤に咲いた佛桑花の下蔭に、靜かに葬られた。斯くて弱き者の靈を永久に慰めてやるのが、子供達の務であつた。

間もなく大正十三年の總選舉が始つた。長い間の腰辨生活に見切をつけた私は、郷里から出馬して、陣笠の群に投ずることになつた。私達は思出多き臺北の官舎を引拂つて、居を東京に移した。

東京に移つてからの子供達は、そこかしこ、可愛らしい子兎の遊んでゐるのを見ては、頻りに欲しがつてゐた。併し臺北に於ける子兎の悲慘な最期に思を走するとき、どうして

も子供達の希望を容れてやる気にはなれなかつた。斯くて二年の間は事なきを得たが、不幸にも私達は、再び同じ悲しみを繰り返すべき運命に置かれた。

私が山陰地方の遊説から歸つて來たのは、去る七月二十日の晩であつた。私の歸りを玄關に迎へて呉れた子供達は、何はさて置き、私の留守中に可愛らしい白兎の子を霞町の縁日で買つて來たことを、如何にもうれしさに話して呉れた。

成程眞白な子兎が、『初めて御目にかかります』と云つたやうな表情をしながら、可愛らしい涼しい目元で私の顔を見たかと思ふと、そのまゝ座敷中をビョン／＼跳廻つて見せた。白兎に縁故の深い山陰の旅から歸つて來た私は、この子兎を見て身自ら『大黒様』になつた様な氣分がしてうれしかつた。さうして早く小屋を作つてやらねばならぬと思つた。

其夜は無事に明けた。翌日子供達は早朝から羽田のプールに出かけて夕方歸つて來た。晩飯が済むと間もなく、子供達は晝間の疲れで早寝をしてしまつた。併し子兎は夜に入つてからも、不相變、そこいらを跳廻りなら、獨りで喜んでゐた。さうして何時の間にか、臺所の板の間を舞臺として楽しく遊び暮してゐた。

女中達は買物に出かけ、私は二階の書齋でペンを走らしてゐた折から、キュー／＼と云ふ子兎の鳴き聲が聞えた。茶の間で夕刊に読み耽つてゐた家内が、びつくりしながら、臺所に駆けつけて見たが、もうその時は子兎の影さへ見えなかつた。

弱き者の間隙に乗すべく、密かに窺ひすましてゐた犬奴は、電光石火の如く子兎を奪ひ去つたのであらう。斯くて悲惨な最期を遂げた弱き者に對し私達は同情の涙なきを得なかつた。殊にその死骸さへ求むるに由なき果^{はか}なきを思ふとき、私達の悲みは一層であつた。

翌朝、この事變のあつたことを初めて知つた子供達は、小屋を早く作つてやらなかつたことを悲しんだ。さうして私は一再ならず弱き者を自由に解放し過ぎたことの誤を悔いた。弱き者を餘りに自由に解放したことが、この悲しき經驗を二度も繰り返した原因であることに氣の付いた私は、寧ろ私達の愚かさを恥ぢずにはゐられなかつた。

嘗て南北戦争の結果、北軍の勝利は南方に於ける奴隸の解放となつた。併し自由に解放せられた彼等の或者は、聲を放つて泣いたといふ史實がある。

過る世界大戰の末期に於て、絶叫したウエルソン大統領の『民族自決主義』に促されて、

幾多の弱小民族は自由に解放せられた。併し解放せられた彼等の現状は必ずしも幸福ではない。

比律賓を初めとし、幾多の植民地に於て、弱小民族の解放が、今尙盛んに叫ばれてゐる。併し私達は解放された者と、解放されざる者と、何れが幸福なるか、又何れが安全なるか今俄に豫断は出来ない。

丁度明治四十五年一月十九日の朝であつた。私は玖瑪は東部の港サンチャゴ・ド・キュバに上陸した。斯くてハバナを中心に約一週日を玖瑪の視察に費した。其結果私は玖瑪共和國が合衆國から解放されて、獨立の美名に酔ふよりは、寧ろ解放されずして合衆國の一部を成すことの遙かに幸福なるべきを痛感したのであつた。

更に翌大正二年には偶然にも前年と同じ一月の十九日に、比律賓はマニラの港に上陸した。玖瑪と共に西班牙の手から合衆國の手に移つた比律賓、私は解放されて獨立した玖瑪よりは、解放されざる比律賓の方が遙かに幸福なりと感じた。私は將來とても、或強大國の一部を成すことが、彼等の幸福と安全とを完全に維持する所以なりと信ずる。然るに彼

等は熱心に解放を主張し、獨立を要求してゐる。そこに爲政者の苦心も存するのである。

最近我國に於ても弱き者の解放が叫ばれるゝ様になつて來た。公娼解放の如きその一例である。それも結構のことだ。併し世の中には弱き者を襲撃せんとする幾多の兇敵が到る處に伏在してゐることを忘れてはならぬ。

私達は弱き者を解放する前に、先づ彼等に安全に生き、幸福に暮し得べき方法と技能と領域とを授けてやらねばならぬ。さうして兇敵の襲撃から絶対に彼等を確保しなくてはならぬ。これ丈けの準備なき解放は寧ろ彼等を不幸ならしむるものである。單に解放する丈けの同情は、彼等を破滅に導くの虞れなしとしない。

自由解放に由て得た悲劇程恐ろしいものはない。子兎に自由を與へ、之を解放したことによつて得た私達の悲しみを、この上、人間社會にまでも及ぼすことは絶対に避け度いものだ。

雨の飯盛山から

『都をば霞と共に出でしかど秋風ぞ吹く白河の關』と歌つた能因法師の昔語りを引合にするまでもなく、涼しい秋風の吹く白河の町で講演したのが二十六日、その夜は東山温泉に一泊した。

二十七日午後の高田町の講演に先だち、早朝自動車を驅つて會津は鶴ヶ城趾を初め、當年の會津武士が奮戦力闘したその史蹟を訪ねて見ることにした。秋雨の降りしきる中を、飯盛山に上り、白虎隊の墓を展じて感慨無慮、立ち並ぶ十九の墓標に残る少年の意氣を思ふとき、今更ながら會津武士の雄々しさを痛感せざるを得ない。

今から二十何年も前のことである。札幌に會津出身のNといふ未亡人が居られた。その頃札幌農學校の學生であつた自分は、或縁故から時折遊びに行つては親切にして貰つたも

のだ。この小母さんがストープにあたりながら、よく會津戦争で難儀された當時の話をして呉れた。『ホントにあの當時のことを考へると、御前は敵なんだからこんな親切にすることは出来ない筈だ』といつては笑ひながら、不相變親切にして呉れたことを思ひ出して見た。會津戦争に我が鹿兒島は小母さんのいふ通りに會津にとつては敵であつた。而も兩者相似たるものゝ多いことを思ふ時、特に白虎隊自刃の蹟を訪ねて感慨なきを得ない。

會津の藩校日新館の教育は、忠孝を專一とし、文武兩道を勵み、上下の分を正し、驕奢安逸を戒むること極めて嚴重であつた。加之、その家庭教育も一切柔弱を排し、不義を絶對に許さなかつた。即ち會津藩の教育は『利』よりも『道』を先にし、『才』よりも『人格』を重んじ、『知』よりも『行』を先にするといふにあつた。會津武士の精神は、その源をこの教育に發し、白虎隊少年の悲壯なる最期はこの精神の必然的發露たるに過ぎない。……而もその教育が我が薩藩のそれと一致せる點に於て特に興味なきを得ない。

篠突く雨の中に血路を開いて飯盛山に白虎隊の少年達が辿り着いたのは、明治元年八月の二十三日であつた。而も時は既に遅かつた。城下の四面は夙くも官軍に圍まれ、火の手

は各所に高く上り、大砲小砲の響は凄じく聞こえ、鶴ヶ城は濛々たる火煙に包まれ、五重の天主閣は暗愴として色も無かつた。

この悲壯の光景を眼下に見下した白虎隊の少年達は無念の齒を鳴したが、大勢非にして如何ともすることが出来なかつた。『土に歸る！』彼等十六歳から十七歳までの少年達が選ぶべきは、たゞこの一途あるのみであつた。『自刃！』これが彼等の選ぶべき最後の手段であつた。斯くて白虎隊烈士の精靈は飯盛山上永遠に消えてしまつた。

今自分は、白虎隊十九少年の墓標の前に立つてゐる。鶴ヶ城趾は雨に煙つて眼下遙かに當時の慘劇を偲ばしむるものがある。自分は去る八月二十七日の夕暮近く、淨光明寺に南洲翁以下多數先輩の墓を展した。今その折の感想をこゝに思ひくらべ、今更ながら教育の力の偉大なるを讚美せざるを得ない。

會津武士の意氣と薩南健兒の元氣。この二つが、全國民の間に徹底するに於ては、直ちに今日の憂ふべき世相は救済し得らるゝものと信ずる。教育改善の方向は、たゞ一途『人格教育』へ！

—大正一五・九・二七—

花魁の力

大西郷逝いて正に五十年、世の中が變るに連れて、益々翁の偉大なる人格は光つて見える。

孫が見たいといふ老父の希望に任せ、二人の子供を連れて歸省したのが、去る八月二十一日。私學校の一員として西南の役に從軍し、本年八十の高齡に達するも、頑健壯者を凌ぐの慨を有する私の父は、孫達の爲め、朝夕となく『戰物語』を試みては、頻りに大西郷の徳を讚え、その死を惜んだ。斯くて私達が翁の墓を淨光明寺に展したのは、二十七日の夕景であつた。私は墓標を前に翁の偉大なる人格を子供達に説きながら、様々の事を考へて見た。

維新の當時人才雲の如く輩出した鹿兒島に、近年頻りに人才缺乏の歎聲を聞くに至つた

原因は、果して奈邊に在るのであらう。

戦争は多くの『人』を死滅に歸し、且つその『種』をも絶滅せしむる。西南の役に於て心身共に優秀であつた幾多の人才を失つた鹿兒島は、同時にその優秀なる『種』をも絶滅せしめた。今日淨光明寺に累々として立ち並ぶ幾千の墓標、これが鹿兒島に於ける人才凋落の眞因なるを思ふとき、私は戦争そのものを呪はずにはゐられない。

アーサー・クナツプは嘗て、『二百餘年の長きに互り、平和を持續し、戦争の實際的訓練を怠つてゐた日本人が、日清日露の兩戦役に偉大なる戦闘力を發揮したのは、維新以來、その遂行した文明の異常なる進歩と共に、實に驚くべき一種の奇蹟である』と論じた。

然るに例の平和論者ジョルダン博士は之に對し、『日本人が太平二百餘年の長き歲月を持續したればこそ、始めて今日の如き有力な武勇の國と爲り得たのであつて、その間何等の不思議はない』と主張してゐる。徳川三百年の平和が、ジョルダンの主張するが如く、聽て日清日露の兩戦役に多大の影響を及ぼしたとしたならば、吾々は更に三百年太平の由て生れ出でた源泉を探究して見なくてはならぬ。

『沛公馬上を以て天下を得たり、安んぞ馬上を以て天下を治むべけんや』とは漢の陸賈が高祖を戒めた金言である。十五代三百年の長流を作り得た家康の治國策は、果してどんなものであつたらう。

馬上を以て天下を取つた家康。彼は徳川の流れを永遠無窮ならしむべく、先づ戰國以來荒み切つてゐた士民の心を和げ、彼等をして腰間の秋水を忘れしめ、武勇の精神をその胸裡から失はしむるの政策に全力を注いだ。即ち家康が公娼遊廓を許可し、天下御免の遊所二十有五個所の多きを算するに至つたのは、全く彼が如此遠大な目的に立脚して案出した治國策の一片鱗に過ぎなかつた。モムゼン博士は羅馬史に於て『劍を以て得た國土は再び劍を以て奪はれる。併し劍を以て得たるものは永遠である』と稱し、治國の要諦は『劍に亞ぐに劍を以てするに在り』と説いてゐる。然るに家康は劍に亞ぐに劍を以てせず、武士の木劍竹刀に代ふるに、美人の手練手管を以てした。

長い間の劍戟に倦き果てゝゐた士民は、斯くて譯もなく、蜜の如く甘き彼の祕策に乗ぜられ、天下は擧つて花街の巷と化し、所謂遊女遊所全盛の新時代を生むに至つた。

即ち足一度此不夜城に入らんか、そこには大名も、旗本も、町人も、百姓もなく、總ての階級を超越して、盛に散財の限りを盡したものだ。さうして劍戟に依り荒み切つてゐた男子の心も、傾國美人の織手に抱かれては、自然に軟化せざるを得なかつた。……柔よく剛を制すとはよくいつたものだ。

人心の軟化は總て劍戟を忘れ、戦争を欲せざるに至り、花街中心の平和が維持せられ、軟文學全盛の時代を出現し、俳優文人畫家悉く遊里を舞臺として終始するに至り、徳川の文學は徹頭徹尾花街文學であつた。故に江戸三百年の文化は花街中心の文化であり、徳川三百年の平和は遊里中心の平和であつた。斯くて徳川の流れは三百年の長きに亙り、淀みなく靜かに流れた。

傾城美人の手練、それには確に一城を傾くるの魔力がある。傾國美人の手管、それには確に一國を傾くるの偉力が潜んでゐる。而も家康が此不可思議な偉力と魔力とを逆に利用したところに政策の妙味が在る。……何といつても家康は確に喰へない日本一の狸爺であつた。

日清日露の兩戦役に於ける日本全勝の遠因が、徳川三百年の平和に在りとし、而も平和の流れが遊廓制度にその源を發してゐるとしたならば、『日清日露の兩戦役に於ける日本の勝利は花魁の力によつたものである』といふ結論に到達する。

西南戦争が鹿兒島人に及ぼした民族的打撃は、總て日清日露の兩戦役が日本人全體に及ぼした民族的打撃を説明し、更に過ぐる世界の大戦亂による各國の驚くべき民族的打撃をも説明することになる。茲に於てか優秀民族保全の立場から絶対に戦争を否定せんとする平和論者もある。併し吾々が一國家一國民を形成してゐる以上、時に國家國民の爲め、又世界平和の爲め、總ての貴い犠牲を拂つてまでも劍を執つて起たねばならぬ場合がある。『止むに止まれぬ日本魂』……必要とあれば一齊に起つて國難に赴くの決心と意氣とがなくてはならぬ。

大西郷が薩南健兒に擁せられて起つたのも、止むに止まれぬ事情があつてのことだ。日清日露の兩戦役、これも止むに止まれぬ實情に促されての奮起であつた。吾々は常に平和を希ふ。吾々は常に戦ふの實力を備へながら、常に戦はざるの努力を必要とする。戦ふの

實力を缺き、戦ふの意氣を有せざる國家國民の選ぶべき途は只だ衰滅あるのみだ。

家康が士民の心を軟化し、劍戟を忘れしめんが爲めに採用した公娼制度は、確にその目的を達した。而もその効果が日清日露の兩戦役に迄影響したりとせんか、彼の採用した政策は確に時の宜しきを得たものであつた。併し時世は進化し、世界の大勢は一變した。徳川時代に好適した制度が、大正の今日依然として適切なりとはいへぬ。今日『花魁の力』に由て平和を維持しよう等と思ふ人は、一人もなからう。又在つてはならぬことだ。

大西郷は嘗つて『徳川氏は將士の猛き心を殺ぎて世を治めしか共、今は昔時戦國の猛士より猶一層猛き心を振ひ起さずば、萬國對峙は成る間敷也』と言はれた。而も今日はより以上國民の勇猛心を必要とすべき實情に在る。

我國今日の急務は物質主義に墮落し切つた國民精神の作興であり、享樂主義の中毒に悩み切つた國民元氣の振興である。而も此大業を達成し得るものは、柔和な『花魁の力』にあらずして實に剛健なる『人格の力』である。然り『偉大なる人格大西郷の再現』である。

—大正一五・九・二四—

力 一 杯

我國の驚くべき文化的發展が、維新以來僅か五六十年の短い歲月を以て遂行せられたことを思ふとき、吾々是一種の『國民的誇』を感じずにはゐられぬ。故に一般外國人がこの偉大なる業績を世界の一大奇蹟として考へるのも無理からぬことである。併し如此、大業の達成には國民全體の非常な努力が傾倒されたことを忘れてはならぬ。

『力一杯』！これが我國の文化的發展を今日あらしめた唯一の原動力である。

更に、我國が日清日露の兩戦役に全勝を博したことに就て驚異を感じたのが、彼等多くの歐米人であつた。併し吾々は、この二大戦役に勝たんが爲めには、國家國民を擧げて、力戦苦闘したことを忘れてはならぬ。

『力一杯』！これが此の兩戦後に全勝を收め得た總ての源泉である。

今から十六七年も前のことである。自分が伯林大學在學の當時、日本から青年撞球家△君がやつて來た。同君の妙技は直ちに伯林に於ける斯界の認むるところとなり、到着間もなく、ブダベスト出身の世界的選手某なるものと試合をすることになった。二週間繼續のゲームで、相手には可なり多くのハンデキャップが付てゐた。然るに試合の結果は、遂にタイでもつて同君の勝利に歸した。斯くて同君の名聲は益々伯林市中に高くなりまされた。さうして之も國威發揚の一つだと思ふと、吾々迄が、決して悪い氣持はしなかつた。

或晩のこと、吾々は聲援の爲め、大舉して競技場に出かけた。さうして試合の狀況を目標しながら、大に感ぜざるを得ない一事のあつたことを、今によく記憶してゐる。

△△君は矮小な體軀に一杯の力をこめ、蒼白な顔色をしながら、球を撞いてゐる。そこには勝たんが爲めの努力以外に、何等の餘裕を發見することが出来なかつた。自分はこの場合『力一杯』といふ言葉以外に適當な形容詞をどうしても發見することが出来なかつた。然るに相手の男は巨大なる體軀を靜かに運びながら、何等の屈託もなく、たゞ意のままに球を弄んでゐるかの如き態度で、實に餘裕綽々たるものがあつた。

斯くて△△君は戦には勝つたが、そこには一厘の餘裕だに残し得なかつた。併し負けた相手は、そこに尙ほ二分の餘裕を残してゐた。勝つた△△君の顔色は、蒼白になつて陰氣に見えたが、負けた男の顔色は、紅色を帯びて如何にも晴れ々しく見えた。

本年の九月玉川のプールで行はれた日米水泳大會に就て、同様の事實を發見したことを吾々は遺憾に思ふ。

兩國選手の醫學的調査の成績に依れば、米國人選手には競技後、總ての點に於て、尙ほ餘裕を存してゐたが、日本の選手には、殆どその餘裕がなかつた。即ち日本人は全力を擧げて競技に従事して遂に勝を制した。併しそこには『力一杯』といふことの外、何物をも残し得なかつたといふ悲哀がある。

日清日露の兩戰役に於て日本は全勝を得た。併し勝つた日本に何等の餘裕が無く、負けた支那及露西亞に、却つて餘裕綽々たるものゝあつたことを思ふとき、吾々は大に考へて見なければならぬ。

我國今日の文化が、『力一杯』にやつた仕事であつて、吾々に何等の餘裕がないとすれば

そこに色々の缺陷が現はれて来るのは當然である。最近憂ふべき世相を見なければならぬ
 實情になつて來たのも、所詮はこの缺陷の現れの一に過ぎない。

『力一杯』といふことは、國家非常の場合には無論必要だ。併し年百年中、朝から晩迄、
 『力一杯』でやりつゞけねばならぬやうな運命に置かれた國家國民は、悲しむべきもので
 ある。吾々は常に『二分の餘裕』を残しても、尙ほ且つ、總てのものに打ち勝つの『實力』
 を修得し度いものだ。これが今後日本及日本人が、世界的に生きる所以であり、永久的に
 榮え得る所以である。

— 大正一五・一〇・二九 —

法律を超越せよ

日本が文明國であり、法治國である以上、法律が極めて重要なものであることはいふま
 でもない。併し大切だからといつて、之を餘りに偏重し過ぎると、そこに幾多の弊害を生
 ずる。

一昨年であつたと記憶する。米國の國務卿が『世界中で最も多く法律を製造する國は我
 米國であるが、之は速かに改めねばならぬ』といつたことがある。法律規則をよく作るこ
 とに於て獨逸も敢て米國に負けぬ國だと信ずる。但し獨逸では出來た法律規則が、よく國
 民の實生活に則してゐるばかりでなく、必ず之を尊重するの美風が國民全體によく行き渡
 つてゐる。

然るに我國の法律規則は國民生活の實際と没交渉のものも敢て少くない。従つて出來た

法律が尊重されないといふ弊が著しい。日本人は無暗矢鱈に法律規則を作るが、何時の間にかそれを神棚に祭り上げ、けろりと忘れてしまふ國民だ。

そればかりでない、日本人程法律萬能の弊に囚はれた國民はめつたにあるものではない。官界に民間に、法律専攻の者が常に特權階級を占有し、極めて有利の立場に置かれてゐる。立身出世の近途は法律を學ぶに在りといふ空氣が、國民全體に充滿してゐるのが、今日の實情である。茲に試験制度や、教育制度の恐るべき缺陷を見出すのである。

その結果行政も政治も、徒らに法文の解釋に力を盡し、枝葉末節の法律技術に貴重の時間を空費し、著しく行政の能率を低下せしめ、且つ政治を驚く程低調ならしめてゐる。

斯くて我國の政治、行政は形式一點張りの時弊に陥り、之等法律技師の手によつて、こね上げられた『模型政治』が、次から次に陳列棚に羅列せらるゝの奇現象を現出するに至つた。

形式に於て世界の一等國と稱せらるゝ我日本が、その實質に於て落伍者たるの悲哀を感じつゝある所以のものは、全く法律萬能の盲念に捕はれてゐる必然の結果である。

嘗て東京帝國大學に五年の間教鞭をとつてゐた獨逸の經濟學者W博士が、日本を去るに當り、親しく自分に話して呉れた話の一節に『日本の如うに法律萬能の國は世界廣しと雖も他にはない。日本が此弊風から速に目覺め自然科学及自然科学者を尊重することにならぬ以上、日本は未來永劫、歐米の列強と相伍して行く程の國力を充實せしむることは不可能だ』と斷定した。

之等外人の批判を待つ迄もなく、我國の眞の發展は法律萬能の現状を打破し、國民生活の實際に觸れた科學的行政政治の完成を期することに出發しなくてはならぬ。

而してこの事は法律家諸君の手によつて先づ解決されねばならぬ。味噌の味噌臭きは眞の味噌ではない。法律家の法律家臭きも亦眞の法律家ではない。法律を超越してこそ、初めて眞の法律家が出來上る。法律家諸君、先づ法律を超越せよ。これが我國の時弊を根本的に救済し、眞の法治國を完成する所以である。

シルクハット

四四

日本人は一般に『見え坊』だ。……見え坊なるが故に、知らぬくせに『知つたかぶり』をし、臺所は火の車でありながら、玄關先では『物持の眞似』をしたがる。

今日は一つ、カレーライスで済まさうと考へながら、食堂にはいつた場合でも、隣のテーブルで定食を食べてゐる人のあるのを見ると俄に豫定を變更して、自分も定食を命ずるのが普通だ。如此、何時も他人本位で行くところに、日本人の見え坊が窺はれる。

在歐日本人が、ホテルやレストーランのボーイ等にチップを餘計に遣り過ぎて、却つて馬鹿にされるのも、矢張り見え坊の悲哀だ。『世界中で矢鱈に金を呉れる馬鹿な國民は、一番金持のアメリカ人か、さもなければ、一番貧乏な日本人だ。殊に持たぬくせに、よく呉れる日本人は、世界一の大馬鹿者だ』とは、貰つた奴等の陰に廻つての悪口だ。

近年、シルクハットをかぶる人が、馬鹿に殖えて來た。西洋模倣の好きな日本では、シルクハット無しでは、行ける場所にも、行けぬことになつてゐる。

併し、鼻べちやな、脊の低い、脚の曲つた日本人が、シルクハットをかぶつた格好は丁度猿公にシルクハットといつた様な感がする。見え坊の積りか知らぬが、餘りぞつとしないスタイルだ。猿の人眞似といつて馬鹿にするが『人の人眞似』も餘り讚めたものではない。日本には日本獨特のシルクハットがありさうなものだ。新帝陛下の勅語にも『模倣を戒め創造を励め』と仰せられてゐるではないか。

シルクハットに就て思ひ起すことがある。僕が伯林大學留學中の出來事であるから、もう十七年も前のことだ。

下宿のお婆さん、どうしても僕のシルクハット購入に同意しなかつた。『年に三四回しか用のない帽子を買ふなんて、不經濟至極だ。必要が出來たら、わしが借りて來てあげる。』といふのがお婆さんの反對理由であつた。……斷つて置くが此お婆さんは學問があり、獨逸人氣質を最も完全に具備してゐる女であつた。

四五

僕はお婆さんを説得すべき好機會の到來を窺つてゐた。ところが幸にもその時が來た。

一九一〇年の二月八日、伏見の若宮様が妃殿下と御揃ひで、大使館に御台臨になるといふので、大使から案内があつた。僕は好機逸すべからずと考へて、直ちにお婆さんに談判を開始した。『僕達の宮様が遙々日本から御出ましになつた。明日は大使館で拜謁を賜るのだ。苟も我輩は日本の官吏だ。まさか損料貸のシルクハットでもあるまいぢやないか』とウンと高飛車に出た。

『宮様の拜謁に、シルクハットの購入は當然のことだ。直に買つて來るがよい』と、半年の間強固に反對してゐたお婆さん、譯もなく賛成してしまつた。併し『十五馬克も出せば澤山だよ、兎角、外國人には高いものを賣りたがるからね』とお婆さんは付け加へた。

直に帽子屋に出かけた。最初に出して見せたのが三十馬克……お婆さんの口吻を借りていへば驚くべき高價だ。併し帽子屋のお神さんは『もつと上等品を御目に掛けませうね』といつた。さうなると『もつと安い奴を』といふ註文は出しにくくなる。僕は奮發で、『いや、もう少し安いところを』といつた。そこで、二十五馬克の品が運ばれた。

更に『二十馬克位のはないかね』とたづねた。すると今度は、二十二馬克といふ奴を出して見せた。なか／＼小刻みに出て來る。お婆さんの註文とは、まだ七馬克も開きがある。これを買つて歸つたら、きつとお婆さんに御目玉頂戴だ。併しこれ以上、安い奴をといふ勇氣がなくなつてしまつた。『日本人の體面を維持する上に於て』といふのは表面の口實で、その實は『見え坊』の御先棒に使はれてしまつた譯だ。矢張り僕も日本人であつた。斯くて二十二馬克の品が僕の下宿に運ばれた。

『これは立派だ、十五馬克で買へさうな品でない』とお婆さんはいつた。僕は『二十馬克したよ』と答へた。二馬克丈け嘘をいつた譯だ。たゞの二馬克でも嘘には變りがない。嘘はつらいものだ。……『獨逸では、ゲハイムラートの様な立派な人達でも、十五馬克位のものをかぶるのが關の山だ……』お婆さん、かういつて僕の顔をジツと見てゐたが、何もいはずに、そのまゝ僕の部屋を出て行つてしまつた。……云ふまでもなく高いものを買ひ過ぎたといふ不満の色が見えてゐた。

日本の金に換算して、十圓内外のシルクハットが何で高いものか、といふのが、その際

に於ける僕の心持であつた。併し此心持は經濟生活の合理化をモットーとしてゐる獨逸人には、理解が出来なかつたのだ。そこにお婆さんの不満が見出される。

聽て歸朝に際し、此シルクハットは僕の厄介な荷物の一つとなつて日本に運ばれた。併し歸朝以來十有三年の長きに亙り不相變臺灣に制服を着用してゐた僕にとつては、全く不用の代物であつた。たゞ大正十三年の總選舉からは時々陣笠代りに此シルクハットが役立つことになつたが、それとても、年に數回あるかなしかであるから、僕にとつては依然として不經濟極まる代物だ。さうして僕は昨今此シルクハットを手にする度に、例の御婆さんのいつた言葉の數々を思ひ出さずにはゐられない。

當時黃金時代の極に達してゐた獨逸の健實な發達が、かうした質實剛健な國民性に培はれて生れ出でたことを思ふとき、僕は我國現時の憂ふべき世想を匡救すべく、國民の一大努力を要望せざるを得ない。吾々は先づ精神的に經濟的に、大に自覺しなくてはならぬ。『浮華を斥け、質實を尙び』て、初めて昭和維新の大業も達成することが出来よう。

昭和元・一二・三一

模倣から創造へ

普選の前に、我國の現状を靜思するとき、吾人は世相の大に憂ふべきものあるを痛感する。

我國の政治家は、善惡兩面の意味に於て、餘りに動き過ぎる。彼等には、殆ど靜思の時がない。彼等の多くは、靜思の時を作らんとする意志だも有しない。我國に創造的政治の生れ得ないのも、又雄大なる國策の現れ得ないのも、所詮はここにその病源を發してゐる。

釋迦は菩提樹下多年の靜思に由て、始めて『無上道』を完成し、基督は炎熱灼くが如き沙漠中に冥想すること四旬の長きに及んで、始めて或物を會得し、更にマホメットはヒラ山上に沈思すること久しきに亙つて、始めて幻影を見ることが出来た。斯くて世界の三大宗教は、何れも靜思默想に由て、始めて創造せられた。更にダンテ、パンヤン、スコット、

ゲーテ、ヘーゲル等多くの文豪哲人に就て見ても、その大創作には、何れも例外なく、静思と默想とを要した。宗教藝術共に之が創造には、常に寂靜を必要とする。まして大なる政治の創造に静思默想の必要なる、敢て多辯を要しない。

實行に先つて静思し、活動に先んじて默想せよ！これが今日の政界を淨化し、政治を人格化し、以て雄大なる創造的政治を我國に確立する所以である。過去半世紀に於ける我國の政治は、誰が何といつても、模倣一點張りの政治であつた。一も西洋、二も西洋、斯くて出来上つた『新日本』は、一種の模倣バラックに過ぎなかつた。而も風雨正に六十年、この急造バラックは、今や改築の急務に迫られてゐる。

南洲翁はその遺訓に、『廣く各國の制度を採り、開明に進まんとならば、先づ我國の本體を据ゑ、風教を張り、然して後徐かに彼の長所を斟酌するものぞ。否らずして猥りに彼に倣ひなば、國體は衰頹し、風教は萎靡して、匡救す可らず、終に彼の制を受くるに至らんとす』と稱し、更に『猥りに外國の盛大を羨み、利害得失を論ぜず、家屋の構造より、玩弄物に至る迄、一々外國を仰ぎ、奢侈の風を長じ、財用を浪費せば、國力疲弊し、人心浮薄に流れ、結局日本身代限りの外有る間敷也』と説き、盛に西洋模倣の憂ふべきを痛論してゐる。

吾人は大に海外に學ぶべきである。學んで而して先づ静思すべきである。然るに我國の爲政者が、たゞ徒らに模倣に急にして、静思を怠り、今や南洲翁が、夙に憂ひとしたところを、現實に味はねばならぬ様な世相に、我國を導いてしまつたことは、全く遺憾至極である。吾人は此際速に國家匡救の第一線に邁進しなくてはならぬ。而して國民の總てが『建國の精神』に甦るとき、始めて吾人安住の新國家は完成を見ることが出来る。

國家を汽車に例へて見たとき、之が進行の安全を期せんが爲めには、先づレール及機關車の選擇に最善の注意を拂はねばならぬ。『大日本帝國』と稱する特急列車の走るべきレールは、『建國の精神』でなければならぬ。此レールは風雨に曝すも、決して腐蝕の虞れはない。又列車の先頭に立ち、之が原動力となるべき機關車は、『三千年の歴史』でなくてはならぬ。此機關車は總てのものを動かすに足るべき偉大なる力を具有してゐる。此レールの上を、此機關車が力一杯に走りさへすれば、我國獨特の『民族精神』は遺憾なく、その機

能を發揮することが出来る。従つて客車に外國人が乗つてゐようと、又貨車に外國品が積まれてゐようと、何等の心配もなければ、何等の危険もない。

我國今日の急務は、外國製のレールに換ふるに、國産のレール『建國の精神』を以てし『三千年の歴史』と銘打つた機關車を、内國の工場に求むることである。而も此大業を達成せんが爲めには、眞に愛國の熱情に燃え切つた、一大人格政治家の出現を必要とする。

普選を前に、國民の靜思を必要とするの秋が來た。吾人は速に政治の模倣から創造に進むべく、先づ靜思黙想しなくてはならぬ。

—大正一五・一二・一九稿—

ボイス、ビー、アンビシヤス！

教育の目的が學校の建設、文字の普及、及知識の注入であるとしたならば、我國の今日には確に教育の黄金時代である。併し教育の眞の目的は斯の如き形式の完備にあらずして、『人間』の完成であることを思ふとき、吾人は我國今日の教育に對し、大なる失望を禁じ得ない。

學校の普及と共に、國民の教育は著しく進歩した。貧富の別なく修學の途は開けた。従つて近年國民の知識は一般に向上し、且つ平均するに至つた。斯くて文字なき者の數は著しく減退した。

併し『劃一』と『形式』と『詰込』とに禍せられた現時の教育は『人間』として『國民』としての精神的訓練に於て非常な缺陷を有する。而も此缺陷が今日の憂ふべき世相を生む

に至つた最大原因なるを思ふとき、吾人は教育制度の一大革新を思はざるを得ない。

文字あるものが、文字なきものよりも不信になり、有學者が無學者よりも不徳になるといふ世の中。斯くて國民の總ては物質に囚はれて、享樂を思ふに至つた。

汗と脂とを以て正しく生きんよりは、寧ろ口先を以て安樂に生きんとするの傾向あるは、實に今日の一大時弊である。國民精神の頹廢も、國民意氣の衰滅も、所詮は誤つた教育制度の恐るべき悪影響たるに過ぎぬ。

教育の一般的目標は『國民生活の安定』であり、『全人格の完成』である。従つて第一の目的を達すべく、その知識は實際的のものであらねばならぬ。又第二の目的に添ふべく、その訓練は精神的でなければならぬ。

吾人は實際生活に没交渉な高度の知識の注入よりは、寧ろ國民生活の實際に即した、低度の知識の修得を要望する。吾人は文字ある不道德家よりは、寧ろ文字なき人格者を要求する。

昔の不完全な寺小屋教育が人物養成の點に於て、寧ろ今日の完全なる學校教育に優る所

以のものは、全くその教育の方針が『人間教育』にあつたからである。即ち人格教育の必然的結果である。

夫の吉田松蔭が、江戸傳馬町の獄屋で刑を受けたのは三十歳の時であつた。此青年教育家が松下村塾を開いて學を講じ道を説いたのは、僅か二年半に過ぎなかつた。而もその門下より木戸孝允、伊藤博文、山縣有朋その他幾多維新の元勳を輩出した所以のものは、全く彼の偉大なる人格の感化といはねばならぬ。

彼の一言一行は悉く立派な教育そのものであつた。而も彼の死生觀の一節に『人間僅か五十年、人生七十古來稀、何か腹のいえるやうな事をやつて死なねば、成佛は出來ぬぞ』とあるに察しても、彼の教育方針は親ひ知ることが出来る。

『何か腹のいえるやうな事をやつて死なねば、成佛は出來ぬぞ』といふところに彼の眞生命がある。世道人心の爲めに何等か爲さんと欲するその抱負、その意氣、之れを以て門弟訓育の根本とした。斯くて青年教育者、二年半の短かき教育も遂に大望を抱ける幾多の人才を、國家建造の第一線に送り出すことが出來たのである。

本年の五月創立五十年記念の祝賀會を開催した北海道帝國大學の前身たる札幌農學校が多數官學の間に在つて一種獨特の校風を有し、幾多の人才を輩出するに至つた所以のものは、明治九年創立の當初、教頭として、之れが基礎的完成に努力した米人ウキリヤム・クラーク先生の偉大なる人格の感化である。

クラーク先生はマサチューセツツ農科大學長在職のまゝ、往復一年の契約を以て來任した。従つて彼の在札は僅に八ヶ月に過ぎなかつた。而も至誠純潔にして人格の人たる彼が、身を犠牲に供し、學生を指導した精神的感化に至りては實に驚歎すべきものがあつた。

彼は明治九年七月三十一日に着任し、翌十年四月十六日、札幌を出發して歸國の途に就いた。

〔彼出發の日、學生及職員は何れも馬首を連ねて恩師を見送り、札幌の南六里の驛邊島松に至り、そこで最後の別れを惜んだ。別離の哀情禁じ難きクラーク先生は遂に南部産の駿馬に跨り、聲ほがらかに『Boys, be ambitious』の名句を残し、一鞭を駒に與へて坂を登り、疎林の彼方に其英姿を没し去つた。〕

『小供等よ、須らく大志あれ！』これが札幌の校風でありモットーである。彼クラークの教育精神は、即ち茲に在つた。國家有用の材たるべく、彼は學生に向つて大志大望の抱懷を教へた。

彼は一外人に過ぎなかつた。而も彼の在札は僅かに八ヶ月を出でなかつた。斯くても尙ほ且つ偉大なる感化を學生に與へ、不拔の校風を確立するに至つた所以のものは、全く彼の崇高なる人格と、その教育方針に一個の精神がこもつてゐたからである。

現校舎新築以前の札幌農學校は實に貧弱極まるものであつた。自分達の在學當時、入學を許された東京生れの一學生が、札幌到着の日、校舎の貧弱なるを見、失望の餘り、入學を取り消して、直ちに東京に歸つてしまつたといふ、エピソードを有すること程左様に、その校舎は貧弱であつた。

併し教育の貴きは、宏大な校舎ではない。校舎は貧弱なりとも、その教育の内容だに優秀であれば、事は足りるのである。松下村塾に於ける吉田松陰二年有半の教育が、あの様な結果を收め、札幌に於けるクラーク先生八ヶ月の感化が獨特の校風を確立したるが如き、

之が眞の教育なりといはねばならぬ。

『何か腹のいえるやうな事をやつて死なねば、成佛は出来ぬぞ』と教えた松陰の氣持も『須らく大志を抱懷せよ』の一言を残したクラークの氣分も、言葉こそ違へ、その精神は同一である。吾人は須らく此精神を以て我國現時の教育を根本的に改善しなくてはならぬ。

徒らに大言壯語する様な口先ばかりの英雄豪傑はもう澤山だ。それかといつて、一言目には生活難や就職難を訴へるといつた様な意氣地なしの青年にも愛想が盡きた。

吾人は只だ一途、世道人心の爲めに何物かを爲さんとするの意氣を要望する。人間として國民として、その存在を意義あらしむるの途は、たゞ此意氣あるのみだ。

ボイス、ビー、アンビシヤス！ 之を邦語に譯すると力が抜ける。吾人は原語そのままのボイス、ビー、アンビシヤス！ を我國六千萬同胞のモットーとしたいものだ。然り、ボイス、ビー、アンビシヤス！

——昭和二・一——

波を見る先生

危機を孕んだ第五十二議會も、朝野三黨首會見の結果、俄かに平靜に復した。然るにそれも、つかの間、議會の空氣は、最近更に一變し、昨三日の本會議の如き、再び泥合戰の演出を見ることになつた。この情勢は恐らく今後も繼續せられ、相變らず、低級な彌次が飛び、亂闘亂舞が演ぜらるゝことであらう。

議會心理を知らぬ人達の眼には、之等の事象は、甚だ不愉快に映するにちがひない。併し議場の空氣は一種の變態心理に支配せらるゝのであるから、あんな風の場面を、時折演出するのも、自然の成り行であらねばならぬ。

『封建時代には、生命を懸けて天下の取り遣りをしたではないか、立憲治下に於ける天下取りの關ヶ原は、議會なんだから、多少の活劇を演ずるのは當然のことだ』といふ人もあ

る。それも一つの観方であらう。

六〇

議員の性格が議場の内外に於て、著しい變化を來すことのあるのは、全く群衆心理の結果である。即ち議場の空氣は、この變態心理により、全然一變せらるゝものである。

人が一度群衆の中に投ずれば、その個性は全然滅却せられ、群衆の行動は、その組成因子たる個人に比して、遙かにその力を増大し、且つ個人の意識的性格は群衆の無意識的人格中に没了せられてしまふ。従つて個人が群衆の中に這入るときは、文明人も野蠻人と化し、學者も無智と變じ、正廉の人も犯罪人となり、懷疑者も確信者となり、懦夫も勇者に變ずるものである。

此一般原則によつて、政治革命も生れ、社會的革命も演ぜられるのである。議場が多数の集りである以上、この變態心理の支配を受けない道理がない。即ち議場の騷擾が時にその極に達するのにも、所詮はこの群衆心理が極度に發揮せられ、個人心理がその影を潜める結果に外ならぬ。

總てのものが熱狂し、總てのものが昂奮するといふのが議場の空氣である。故にこの間に處して、動かさること山の如き冷靜な態度を持するものがあれば、それは確かに異例であるといはねばならぬ。

今から二十何年も前のことであると聽いてゐる。或人が「△△さんと○○さんと、どちらが政治家として偉らいでしょうか」と質ねて見た。ところで質ねられた人の答が面白い。「議場に於ける二人の態度を見るのに、○○は陣笠連と一しよに彌次も飛ばせば足踏みもする。併し△△は、どんな騷擾が起つた場合でも、どこを風が吹くかといつた様な極めて冷靜な態度をしてゐる。この點から考へて見れば、△△の方が○○よりは確かに役者が一枚上だ」といふのがその人の答であつた。

○○にしろ、△△にしろ、その後一時は「憲政の神様」だと謳はれた。ところが「地獄の沙汰も金次第」金に身賣りの神様も出て來る世の中。たゞの人間を無闇に神様に祭り上げるのは慎しむべきことだ。従つてこの批判の適否は論外とするが、何れにしても、熱狂せる議場に於て、常に冷靜の態度を持し、正しき判断をして行くに足るべき人物の幾人かを必要とすることには、何人も異論のないところであらう。

六一

臺灣の東海岸には、港らしい港が一つもない。臺東、花蓮港の兩港さへ、多少の彎曲を見せたばかりの砂濱が、大平洋に直面してゐるに過ぎない。従つて狂瀾怒濤が常に逆巻いてゐるから、艇船の顛覆も敢て珍らしくない。ホントに船客は生命懸けである。

乗船の場合には、砂濱に引き上げてある艇船に先づ船客が乗る。さうすると大波の寄せて来るのを待つてゐた、大勢の生蕃達が素裸のまゝ、関の聲を揚げて、それを押しながら一齊に海に飛び込む。斯くて艇船は海上遙かに浮び出る。無論船客は頭からすつかり潮の洗禮を受ける。

上陸の場合には、船客を乗せた艇船が波打ち際迄漕いで来て、靜かに波を待つ。聽て大波が寄せて来ると、例の生蕃達が一齊に海に飛び込んで繩をひつばる。艇船は波に乗つたまゝ、する／＼と砂濱に引き上げられる。無論この場合にも、船客は潮の爲めにすぶ濡れになる。

出船入船に際し、東部臺灣の港はまるで戦場の様な騒ぎだ。併し此騒擾しい群衆の中にいつも落ち付き拂つた一人の老爺がゐる。長い煙管を腰にぶら下げ、兩手を後手に廻したまゝ、ジーツと沖の方を見詰めてゐる態度は、如何にも冷靜に見える。これが『波を見る先生』だ。この先生が波のよしあしを判断しては、『それ押せ、それ引け』と號令を下す。素裸の生蕃は命令一下海中に飛び込んで、艇船を押したり引いたりする。……この先生なか／＼高い月給を船會社から貰つてゐる。それもその筈だ、この先生が船客の貴い生命を一人で預かつてゐる様なものだから。併し世の中には面白い商賣もあつたものだ。

帝國議會にも、確かに『波を見る先生』が必要だ。私達は議場に於て、丁度東部臺灣に於ける船の出入りの場合と同じ様な場面によく遭遇する。その場合、素裸になつて、海に飛び込む生蕃の役目を演ずる人は、多過ぎて困るぐらゐだ。併し、常に冷靜な態度を以て議場の空氣を洞察し、潮の差し加減をよく判断して行く様な人は甚だ少い。斯くて議場は益々混亂に混亂を重ね、遂に匡救することの出来ないやうな、はめに陥る。

議會政治は群衆政治である。従つて議場が群衆心理に支配せらるゝのは當然である。故に議場が時に混亂に陥り、混合戦に墮するからとて、直ちに非難すべきではない。これは宜しくないことではあるが、群衆心理の現れの一として、或程度迄は止むを得ない事象と

認めねばならぬ。

併し、我國の議場の有様をもつと高尚にし、もつと上品にして行くことは、決して不可能ではない。吾々議場に入出入するものが、もつと眞面目になり、もつと眞剣になつて、政治を進めて行きさへすれば我國の議會政治の實際は、もつと改善することが出来る。

無我夢中になつて、海に飛び込み、舢舨の繩をひつばるぐらゐのことは、素裸な生蕃にも出来る。政治家はもう少し、重大な使命のあることを忘れてはならぬ。出で、は世界に於ける思潮の大勢をよく洞察し、入つては議場に於ける波浪の大小をよく判断し、一進一退、その宜しきに叶ふことを心掛けるのが、政治家當然の責務ではなからうか。

私は議場に於て『波を見る先生』の一人でも多くなることが、我國の議會政治を向上せしむる所以なりと信ずる。私はこの場合、政治家に向つて先づ『冷靜なれ』と要求する。

——昭和二・三・四——

獨逸の女教師と語る

議會で忙しいこの頃では、筆とる暇さへないのだが、雑誌『海外』の發展を、祈念するに就いては國事に盡すと、その根本精神に於て何等渝りがない。と云つて改めて論策することも、この場合差し控へたいが、伯林大學留學當時の、日記など繰り擴げて、思出に耽つて見る。——めぐり當てた所が丁度今から十八年前、しかもこの筆をとると同じ日の、三月十二日(明治四十三年)のページだ。それも不思議なめぐり合せで、そこにはどうしたのか海外發展に關した記録が載せられて居る——さうだ、これで責めが塞げるのだ。

僕の語學の教師は、伯林の北部にある某小學校の女教員だ。申すまでもなく、それはオールド・ミスなんだが、その先生と色々の話をしてゐる内に話がはづんで植民のことに及んで來た。

『日本は大に植民地を広げるつもりだらう。』

彼の女はかういつて、僕の顔をじつと見つめた。

『植民地なんてもうこりくだ。厄介で始末におへぬ。』

僕はかう答へた。

『そんなことはなからう。今に日本が亞細亞を統一する時が来るだらう。尤もそれは私達の生きてる内のことではないにしても——』

『日本の使命は、無論亞細亞八億の民族に世界最高の幸福を與へんとするにある。従つて亞細亞の將來は現状のまゝ、何時迄續くかは疑問だ。併しそれよりも問題は、歐羅巴自身にあるではないか。』

かういひながら僕は言葉をつゞけた。

『即ち歐羅巴にはさういつた様な統一の時期がきつと到來するだらう。』

かう云ふと彼の女は、その通りだと、いつた様な表情をしながら、

『今に露西亞が歐羅巴を統一するだらう。』

といふから、これには直ぐにその通りだともいへず、

『歐羅巴を統一するものは露西亞にあらずして、獨逸だらう。』

とお世辭を一つはづんで見た。

『いや露西亞だ、今でこそ教育がないから露國民は馬鹿だが、今に偉らくなつてきつと歐羅巴を統一するに違ひない。』

かういつて、彼の女は暫時黙想をつゞけた。……歐羅巴の將來、さうして亞細亞の將來果してどうなつて行くことだらう。

女教師の弟に獨身の若者で、役人生活をしてゐる一人がある、此先生のいふことがまたなか／＼面白い。

『日本は盛に獨逸に留學生を送つてよこすが、今にその人達が日本に歸つたら、學問を實地に應用して、色々の産業も興るだらうから、獨逸の華客先がだん／＼減つて來ることになるね。』

『そんな馬鹿なことはなからう。』

と笑ひにまぎらはしては見たが、先生なか／＼承知しない。そこで

「獨逸だつて同じぢやないか、英吉利や佛蘭西がお前と同じことをいつてゐるだらう。」
と、しつぺい返しをしてやると、先生蛙に水のすました顔で、

「さうだとも。」

と簡単にやつてのけた。

世の中は廻り持ちだ、今に獨逸の向を張つてやるぞ。

女教師の父親といふものはハンブルグの商人で、日本にも行つたことがあるとの話。併しそれは、まう三十年も前のことだ。その親が持つて來たといふ、日本の寫眞が大分保存されてゐるのを女教師先生が見せて呉れたなかに、チョンマゲの車夫もあれば、カゴかきの寫眞もある。これが日本文明の代表者だと思つてゐるのだから、たまつたものではない。日本の義務教育の布かれてあることを話してやると、如何にも珍らしいことのように、彼の女は思つたらしい。：：人を馬鹿にした話だが：：それで早速弟に

「日本でも獨逸と同じ様に、義務教育を実施してゐるさうだ。」

と吹聴するに至つては沙汰の限りだ。

以上は十八年前の本月本日に於ける僕の日記の一節に過ぎないが、これによつて見ても日本の真相が如何に海外に知られてゐないかと、よく解る。小學校の先生が、我國に義務教育の布かれてゐることさへ承知してゐないといふのだから他は押して知るべしだ。

我々は先づ自分達が海外の事情を熟知する前に、日本の真相を彼に熟知せしむべく、最善の努力を爲すべき必要がある。遠く歐羅巴といはず、一章帯水の亞細亞大陸に於てさへ我國の真相は解つてゐない。又彼の地の實情も我國に明瞭でない。そこに幾多の不利不便が潜んでゐる。善隣の誼しみも此缺點に禍されてゐるのが、今日の實狀である。我々は先づ近きより初めねばならぬ。此意味に於て雑誌『海外』が海の内に外に帯ぶるところの使命甚だ大なるを思はねばならぬ。即ち僕はその健實なる發達を熱望して熄まぬ。

新政黨の樹立へ

茲に一つの立憲國があり、議會政治の行はれてゐる國がありと假定する。而もその國の政黨が、一つとして議會に絶對多數を有しないものばかりの小黨分立であると假定した場合に、その國の政局安定は何によつて實現することが出来るであらうか。考慮するまでもなく、小黨分立の國に於ける政局安定の方策はたゞ一つしかない。即ち政策の相近似する政黨が、互に聯盟を結び、聯立内閣を組織することのみによつて、政局は安定し得るのである。

申すまでもなく議會政治は多數政治である。即ち議會に於て絶對過半数を制するところの政黨が政權を掌握することによつてのみ、政治の安定を見るといふのが議會政治の一般原則である。併し此原則は二大政黨の對立せる場合に於てのみ、規則正しく實現せらるゝのである。嘗て英國に於て保守自由の二大政黨が對立した當時には、最もよく此原則が實現せられた。然るに近年勞働黨の勢力増大し、三黨對立となつてからは、流石議會政治の本家本元たる英國に於てさへ、昔日の如く政權の移動は原則的でなく、兎もすれば政局の安定を缺かんとするの狀勢を示して來てゐる。

況んや獨、佛の如き小黨分立の國に於ては、政局常に安定せず、政變頻々として續發するのが、最近一般の趨勢である。而も一黨を以てしては議會に絶對多數を制し得ざる場合政局の安定は一に政策の近似せる政黨が互に聯結して組閣する以外に方法がない。而も斯る場合組閣の大命を拜するものは必ずしも黨員の多數を擁する政黨の首領に限らない。要は人物本位であつて政局安定の實力ある眞の政治家を目標として大命の降下するのが今日の實狀である。即ち小黨分立の時代に於ては、獨佛に限らず、世界何れの國に於ても、聯立内閣を以てする以外に、政局安定の方法は絶無なりといはねばならぬ。これは決して好ましいことではないが、事情止むを得ざることである。

小黨分立の國に於て、此原則を無視し、政權が變則的に移動したと假定したならば、政

局は益々不安に陥り、爲めに思想界及財界は非常の混亂を來し、國民生活は極端に安定を缺くに至ることであらう。而も斯くの如き實例が、國民の前に遺憾なく展開されつゝあることを思ふとき、吾人は大なる不安を感じずにはゐられない。

世間には政權獲得の手段として、自己黨派の員數を増加せんが爲め、有らん限りの苦肉策を講ぜんとする政黨もある。議會政治が多數政治である以上、それもよからう。併し眞に其政黨が國民多數の輿望を有するや否やは總選舉の結果に依らねばならぬ。總選舉に當り自己の主義政策を、正々堂々と國民の前に訴へ、その共鳴に依てかち得た第一黨であり、第二黨であつてこそ、眞に國民多數の信頼を受けた政黨なりといはねばならぬ。然るに總選舉に於ては第三黨たり、第四黨たりしものが、その後凡ゆる方法手段を講じ、主義政策以外の魔力を利用して盛に他黨の黨員を掠奪し、第二黨となり、第一黨となつたとしたならば、それをしも國民多數の信頼を基礎とした政黨なりといふことが出来ようか。而も斯の如き政黨が政變に際し、次の政權を獲得したとしたならば、それをしも憲政の常道なりといふことが出来るであらうか。

世間には之をしも憲政の常道なりと稱する向きもある。驚き入つた憲政の常道論もあつたものだ。議會政治は多數政治である。政局は多數を有する政黨政派によつてのみ安定することが出来る。その多數は必ずしも一黨たるの必要を認めない。小黨分立の場合に於ては、數黨の聯盟によるも、敢へて不可なしとしない。要は政局の安定を完全ならしむる丈の實を有する一政黨か、然らずんば數黨の聯盟であればよいのである。眞に政局を安定する實力ある者に政局を擔任せしむるのが、ホンタウの憲政の常道であらねばならぬ。然るに世間には、此實力を無視した憲政の常道論が尤もらしい顔をするのだからたまつたものではない。

議會政治は失敗であるとの議論が歐洲諸國に於ても、可なり擡頭して來た。我國に於ても同様の議論が絶無ではない。

議會政治の本場で失敗の議論が産れた以上、之を模倣した我國のそれがうまく行くとは考へられない。併し今更之れを止める譯には行かぬ。自分が大正十三年の總選舉に際し、身を政界に投じた所以のものは、議會政治を内面から改善せんとするの微意に過ぎなかつ

た。爾來既成政黨の腐敗、議會政治の墮落は益々甚しいものがある。而も今回の政變に際し、益々その感を深うしたばかりでなく、政局は一層の不安を來した。金力と暴力とが巾を利かす我國の議會政治革新の要諦は、たゞ一途、既成政黨の解體であり、新政黨の樹立である。黄金萬能の既成政黨を擊破し、陰謀政治を撲滅し、廣く同憂の士を全國に募り國家本位の新政黨を樹立し、人格政治の確立に一路邁進することに依てのみ、國家は政治の墮落から匡救せらるゝことが出來よう。

—昭和二・四・二六—

一匹の蠅

政變と共に政局は益々安定を缺き、財界混亂の爲めに、人心は愈々不安を感じ、新黨樹立の渦巻により、政界は益々多事ならんとしてゐる。此時、此際、風邪發熱の爲め籠城の止むなきに至つたことは、黨人としての自分にとり、可なりの苦痛である。

併し、今日は最早や平熱に復したが、大事を取つて、もう一日寝て暮すことにした。そこで退屈まぎれに、獨逸留學當時の感想録等ひっぱり出して讀んで見た。どれもこれも懐舊の情をそゝるものばかりであるが、就中、一九〇九年の十二月十四日に書かれたものに次の様な一節がある。

僕は伯林に來てから、新に得た一人の親友を持つてゐる。かういふと、如何にも、それが人間らしく聞えるが、決してさうではない。僕の親友といふのは、世の中で一番うるさ

いと思はれてゐるところの蠅先生だ。

寒暖計が零點以下に降つてゐる今日此頃、大抵な奴は死んでしまつたのに、たつた一匹の蠅が、僕の部屋に生き残つてゐるのが不思議だ。晝の間は何處で、どんな風に暮してゐるのか、さつぱりわからないが、夕方になつて、ランプの火がつく頃になると、きまつた様に、その美しくもない姿を見せに來る。

ランプの笠にとまつたかと思ふと、間もなく、テーブルの上に降りて來る。さうして靜かにその羽を展ばしながら、僕の夕食が運ばれて來るのを待つてゐる。聽てそれが運ばれて來ると、今度はうまさうな、その香りをそつとかきながら、舌鼓を打つてゐるやうな身振りをして見せる。

近頃は、すつかり僕と仲好しになつてしまつた。僕が手を差し出すと、先生平氣で指の先から掌の方へ歩いて來る。こゝまで親しみが出來て來ると、彼れの醜い姿が、却つて可愛らしいものゝ様に見えて來る。

先日讀んだ獨逸語のリーダーに『昆蟲の中でも、蠶と蜜蜂は非常に有益なものであるが

蠅と蚊とは人生に取り最も有害である』と書いてあつた。成程さうだ。日本でも『五月の蠅』と書いて、『うるさい』と讀む。『あの人は蠅の様な人間だ』といはれて、賞められたと思ふものは一人もあるまい。

併し世の中から嫌はれものゝ蠅であつても、此冬の寒き日を、不思議に生き長らへ、而も夕暮毎に時を違へず、訪れて來る、その心根を察して見たとき、僕は何となく、憐みの情に堪へ難いのである。まして萬里の異郷に在る身にとつては、蠅一匹でさへ、それが慰安の種子であることを思ふとき、僕は感謝の念が胸一杯になつて來る。

ウオーズウオーズであつたと思ふが『名もない野の花でさへ、私達に偉大なる眞理を教へて呉れる』といった様に記憶してゐる。研究慾に燃え切つた眼を以てすれば、死にそこなひの蠅一匹からでも、私達は、驚くべき哲理を學び得ることが出来る。

僕が今、こんなことを書いてゐるとは、無論知る筈もなく、例の蠅先生、僕の左の手の甲にとまつたまゝ、足や羽をぶる／＼ふるはせながら、靜かに太平樂をきめ込んでゐる。

：此場合、彼れにとつては、そこに何等の不安もない。彼れは今や全く神と共に天國に

遊んでゐる様な氣持でゐるだらう。……

これが、十八年前に、伯林の下宿で書きしるして置いた感想録の一節である。世間にはつまらぬことを書く男だと考へる人もあらう。併し今でも靜かに、その當時のことを冥想して見ると、例の蠅先生の一舉一動が、まさしくと、僕の眼に浮び出て来る。して見れば蠅一匹の印象も決して馬鹿にはならぬ。

最近に於ける我國の政局及財界の變異は、國民に對し可なりのショックを與へた。併し考へ様に依つては、此ショックでさへ、僕が蠅一匹から受けた感動には比すべくもない。僕が伯林の一下宿屋に於て、嘗て死にそこなひの蠅一匹から感得した哲理は、寧ろ之に比して遙かに偉大なるものであつた。

蠅で思ひ出すのは臺灣生蕃の創世神話である。その中で特に面白いと思ふもの一つをベンの序に書き加へて見よう。

太古開闢の初、一柱の男神と二柱の女神が、國の最中の一きは高く峙つた大山の絶頂、千引岩の上に天降られたが、忽ちその岩が二つに裂けて、自ら八尋殿となつた。こゝを『ビンシバカン』——祖先の地——と名づけて、共に住み給うた。

或日男神が女神達を顧みて、『根據が出来たから子孫を造らう』と仰言ると、女神たちも微笑まれるのであつた。そこで神々は先づ目と目とを合せられたが心適かず、口と口とを合せられたが、やはり適はなかつた。

かくていろ／＼工夫せらるゝ折から一匹の蠅が飛んで来て、女神の隠處に止つた。茲に初めて神々は『成り合はぬ處』と『成り餘つた處』があるを知り、御子生みの術を會得せられ、互に夫婦の道を行はれたので、間もなく數子を得られた。これが人類の始祖である。タイヤル族の創世神話を『生蕃傳説集』から、そのまま拜借して見ると、右の通りであるが、何れの種族、何れの蕃社に於ても、皆似たり寄つたりの神話を傳へてゐる。多くの場合『男女二柱の神が最初和合の道知らず苦心の最中「金蠅」の巧みなる所作にヒントを得、初めてその道を會得し、子孫繁榮の基を開くことが出来た』といふのが普通である。現に彼等蕃人の間には『金蠅の如く巧みに』といふ言葉さへ殘されてゐる。

我國の神話によれば男女二柱の神達は『鶴鶴』にヒントを得て、初めて和合の道を會得

せられたことになつてゐる。然るに生蕃の場合には『金蠅』が『鶴鶴』の役を務めた譯だ。……尤も生蕃神話の中にも『鶴鶴』にヒントを得たといふのが別に存してゐることを忘れてはならぬ。……従つて世の中で一番嫌はれものゝ蠅先生でも、生蕃にとつては、立派なお師匠様なんだから、生みの親よりも一層有り難いものゝ一つになつてゐる。……かうなると、世の中には一つの廢りものもなくなつて來るから面白い。

元來生蕃の神話傳説は、飽迄天真爛漫である。その表現の思ひ切つて露骨なる點に於て又その眞剣にして無邪氣なる眞情の發露せる點に於て、實に世界神話の白眉である。而もその極めてプリミティブであるところに、却つて私達は『人間』としての或物を充分に考察することが出来る。

『蠅一匹』觀じ來れば、人生の總てを遺憾なく、私達に教へて呉れる様な氣がする。

——昭和二・四・二六——

白 髪 染

或日の午後、行きつけの床屋に、あたまを刈らせながらたづねてみた、

『どうだ、白髪染のお客様は相當にあるものかね。』

『相當にありますとも。』

彼はかう答へながら、二三遍鋏を動かしたかと思ふと、更に言葉をつゞけた。

『併し、何といつても薬が日本製なんですからね。これが舶來の薬品であり、流行でしたら、もつと大變な流行になりませうよ。』

彼は何氣なく言つた。併し僕にはそれが何氣なく聞えなかつた。

『白髪染の薬は日本品だ、故にそれ程、はやらぬ。併し、これが舶來の薬品であり、流行であつたら、素晴らしく、はやるだらう。』床屋の主人が無意識に言つた此言葉が、現代日

本の世相をそのまま言ひ現してゐるところに、吾々は深甚の注意を拂はなくてはならぬ。

一も西洋、二も西洋、西洋摸倣に終始一貫したのが明治大正六十年間の歴史であつた。而も世は昭和の御代となり、若き新帝陛下は、この時弊を痛感遊ばされ、『摸擬を戒め、創造を勗め』と仰せ出された。然るに、摸倣の風潮は依然として止むべくも見えぬ。

西洋で婦人の斷髪が流行すれば、——假令、それが虱豫防の手段であつたとしても、——日本では直ぐにその眞似をする。西洋婦人の頭髮は、ブロードで、細く軟かで、薄く縮れてゐる。従つて斷髪必ずしも悪くはなからう。併し日本婦人の頭髮は漆黒で、剛直で、房々と伸びてゐるところに、その値打ちがある。子供ならいさ知らず、女盛りの『おかつば』は、餘りみつともよくない恰好である。而もそれを得意に澄し込むモダン・ガールの氣が知れぬ。

更に、あたみに鍔を當て、火刑に處して、あつたら、みどりの黒髪を惜しげもなく縮らす馬鹿者もある。本人は西洋婦人の縮毛に摸倣の積りなんだらうが、僕達には、それがまたニードローのあたみに見えてならぬ。而も、これがモダン・ガールなんだといつて得意がるのだから、やりきれぬ。

西洋摸倣も、こゝまで來ると、一種の悲哀だ。僕は日本の婦人に、あのみどりの黒髪を文金高島田に結び、振袖姿に、草履踏みしめながら、歐米の都市を濶歩するの意氣なきを遺憾に思ふ。

西洋摸倣の結果は、舶來品尊重の氣風を助長する。舶來の香水や脂粉に化粧をこらすことには、浮身をやつすが、汗水たらして働くことになれば、面を脹らして、横を向く。斯くて國民生活の實際には、無くてもがなの奢侈品が盛んに輸入される。而もそれを見て見ぬふりするのが國家である。國も人も『消費』には頗る熱心であるが、『生産』には極めて冷淡である。そこに憂ふべき貿易の逆調がある。西洋摸倣がこゝまゝ進めば、日本は今に、國人共に物質的には、南洲翁が夙に憂へられた如くに『身代限』をするの外はない。

西洋摸倣が形に止まり、物に限られてゐるうちは、まだ初歩だ。それが一步進めば、思想に這入り、精神に及ぶ。物や形の崇拜は、聽て人や心の尊敬にまで進展する。西洋人でありさへすれば、どこの馬の骨ともわからぬ奴までが偉らく見え、猫も杓子も善良な心の

持主であるかの如く思はれて来る。さうなると、こちらに間隙が出来る。その間隙を發見し、それに乗するのが彼等である。斯くて我等の有する總てのものが、彼等に制せられ、そこに一種の危機を孕むことになる。

過般東京に於て行はれた、不良外人檢舉の裡面には、かうした多くの悲しむべき事實が伏在してゐたのであつた。而も婦人の最も尊重すべき貞操を不良外人の蹂躪に任せて平然たるが如きモダン・ガール續出の原因が、西洋摸倣にあるを思ふとき、眞に國民反省の必要を痛感せざるを得ない。それにしても僕は、『露をだにいとふ大和の女郎花降るアメリカに袖は濡らさじ』と辭世一首を残し、自害の上、その貞操を全うした、遊女喜遊の心意氣が、現代日本の新しき婦人達に段々うすれ行くのを見て、悲しく思ふ。

僕は更にたづねて見た。

『白髪を赤く染める物好きな人があつたらうか。』

かう、たづねながらも、僕は『ありませぬ』といふ答を豫期してゐた。然るにそれがまた意外な答であつた。

『白髪を赤く染めるといふ人は或はないかも知れませぬ。併し若い人達の中には、眞黒な奴をわざ／＼過酸化水素か何かで洗つて眞赤にして喜んでゐる人のあるのをチョイチョイ見受けます。』

これは驚いた。こいつは、あたまを縮らして喜ぶ女以上の代物だ。物好きにも程がある。『どうだ、すっかり西洋人らしく見えるだらう』等と得意がるモダン・ボーイがかういつた如うな仲間から輩出するんだらう。持つて生れた漆黒の頭髪をわざ／＼赤くしてまで、西洋人を眞似る必要がどこにある。摸倣もこゝに至つては實に沙汰の限りだ。

斯くて摸倣に亞ぐに摸倣を以つてするに於ては、その思想その精神に至るまで、悉く彼の支配下に屈服するの止むなきに至るであらう。最近我國に於ける若き者の一部の傾向は確に此實相を説明してゐる。今にして顧るところなくんば、國體は衰頹し、風教は萎靡し、遂に停止するところを知らず、我國は精神的には南洲翁が嘗ていはれた如うに、遂に『彼の制を受くるに至る』であらう。

過去六十年間に築き上げた、新日本の文化は、徹頭徹尾西洋摸倣の文化であつた。摸倣

が文化進展の一階段である以上、吾々は廣く知識を世界に求めなくてはならぬ。併し、吾は彼に學ぶ前に、先づ自らを顧みなくてはならぬ。さうして吾々が『日本民族』であることを自覺しなくてはならぬ。

或民族の有する文化は、其民族固有の民族精神の外的表現である。故に或民族の完成した文化の形式は、之を他の民族に移入することが出来るが、その精神は容易に移入することが出来ない。之が民族心理學上の一般原則である。

我國が、現今憂ふべき世相に悩まされてゐるのは、確に此原則を無視し、徒らに西洋模倣に終始した必然の結果である。故に吾々は昭和の新政に依り、先づ此弊風を打破し、日本建國の大精神に立脚し、『創造日本』の建設に精進し、新文化の發達に最善の努力を致さねばならぬ。

今日は國民總動員の秋である。老幼男女の別なく、國を擧げて『模倣から創造へ』の行進を開始しなくてはならぬ。

而も國家非常の場合には特に青年の意氣に俟つところが多い。僕達は此大進軍を開始するに方り、先づ八千萬國民の總てに向つて青年の意氣を要求する。昔齋藤別當實盛が白髪を染めて軍に従つたのは、彼老いたりといへども、意氣尙ほ壯者を壓するの慨がある。頭髪の漆黒なるは日本人の特徴であり、若き者の表徴である。白きものは先づ黒く染めよ。斯くて國民の總てが青年の意氣に更生するとき、始めて昭和維新の大業は達成せらるゝであらう。

僕は此意味に於て『白髪染』を讚美する。

法律と人格

『法律は貧者を虐げ、富者は法律を支配す』と詩聖ゴールドスミスは言つた。公平なるべき國の法律が、金の力で左右されるといふことがあるべき筈のものでない。併し『地獄の沙汰も金次第』金の力は案外に強いものだ。法律が富者に支配されるといふことも、敢て偶然ではない。

富者に支配さるゝ法律が、その反面に於て貧者を虐げるといふことも、あり得ないことではない。如何となれば貧者には金の持ち合せがないからである。

更に例の皮肉屋のスウィフトはいつた。『法律は蜘蛛の張る網の如うなものだ。小さな蠅は捕へられるかも知れぬが、大きな蜂には突き破られる』と。

法網は一切平等に總ての階級を漏れなく包むべき筈のものである。然るに大きな蜂は取り逃がされて、小さい蠅のみが捕へられることの多いのが世の中である。これは理屈には合はぬが、實際だから恐ろしい。

日本は法治國であり、さうして矢鱈に法律を作る國でありながら、法律に權威の乏しい國である。或人達の門前丈けは、法律が首をうな垂れて素通りする國である。

獨逸はよく法律を作り、且つよくこれを遵奉する國である。それは獨逸帝國の全盛時代であつた。或日伯林の市中を某皇族の自動車が、規定以上のスピードを以て、疾走してゐるのを發見した一警察官は、直ちに『止まれ』と命じ、規定の罰金を課した。此場合法の執行者たる一警察官の態度は嚴然たるものであつた。當時伯林留學中の僕は、此事實を目撃し、流石は獨逸だと思つた。さうして法律に權威ある國だと感じた。

同じ頃倫敦在留中の或獨逸の紳士——それは貴族の出であつた——が、規則以上のスピードを出して自用自動車を走らしてゐたのを巡查にかまつた。巡查は彼に自用車鑑札の有無を質した。ところが彼の所持する鑑札は使用期限が夙に経過してゐるものであつた。併しその場合他に名案もないので、わざと平氣を装ひながら、鑑札を所持してゐる旨を答

へた。すると警察官は『宜しい、然らば速力制限の違反に対する罰金を支拂ひなさい』と稱し、鑑札を見せろといはず、そのまま規定の罰金支拂を命じた。

非常な英國ざらひであつた件の紳士は、その瞬間に大變な英國崇拜家に早變りしてしまつた。彼はいつた。『もしもあれが自分の本國獨逸であつたら必ず、「然らばその鑑札を見せろ」といふところだ。然るに流石は英國人だ、ウツをいはぬが紳士道、僕の一言を信じて見せろといはぬところに大國民の面影が偲ばるゝ。英國は偉らい、獨逸の到底及ぶところではない。』恐ろしく感心してしまつたものだ。

英國は法律を超越し、人格を以て凡てを處理せんとする國だ。そこに英國の偉大さがある。

これもその頃の出來事であつた。初めて日本からやつて來た僕の或友人が、英國に上陸して、先づ税關の検査を受けた。税關吏が彼に煙草の有無を尋ねた。友人は『持たぬ』と答へた。聽てカバンの口が開かれた。運悪く一番上のところに、煙草の函が横はつてゐた。彼はしまつたと思つた。併し税關吏は知らぬやうな顔をして、そつと煙草の函を下の方に

押し込んだ。そして黙つて検査を通して呉れた。彼は冷汗背を潤しながらもホツと一息ついた。『紳士はウツをいはぬもの。』これが英國の紳士道である。あの場合税關吏が『これは何だ、煙草でないか。』といへば僕の友人はウツつきになつてしまふ。紳士の資格を失くしてしまふ。そこに税關吏の紳士らしい深き思ひやりがある。それ以來僕の友人も、すつかり英國黨になつてしまつた。

英國の偉らいのは、かういつたやうに法律以上に、道念を基調とした紳士道が存在するからである。貧富貴賤の別なく法律のよく適用せらるゝ獨逸は確に偉らい。併しそれよりも一層偉らいのは英國だ。法律の力を超越し、『人格の力』に正しく生きて行かんとするところに、英國人の眞の偉大さがある。

東洋の君子國だと誇つてゐる我日本の現状に顧みて、僕は必ずしも、スウキフトやゴードスミスに權威あらしむるの事實なきことを確言することが出來ない。吾々は速に我國の法律に權威あらしめ、更に吾々の人格に光あらしめたいものである。

秋空に富士を眺めつゝ

政戦の爲め東奔西走正に三ヶ月、十月にはいつたら、書齋の人となり、少しばかり自分の仕事を片付けようと思つてゐた。然るにこの二日から更に静岡縣下の政戦に従事することになった。

藤澤、中村の兩氏と共に興津の水口屋に落ち付いたのが二日の午後であつた。興津といへば西園寺公を思ひ出し、西園寺公といへば水口屋を連想させる。即ち水口屋は西園寺詣での大小政客が、必ず宿りするので有名だ。冬温夏涼の静かな興津には、まことにふさしい宿屋である。

その夜、由比、富士川兩町の演説を盛會裡に濟ませ、歸つて來て床に就いたのは、もう夜中の二時であつた。

今日日は夜間だけの演説會である。即ち忙中閑を得て、午前中に清見寺を見、更に園藝試験場を訪ねた。

清見寺から見たこの邊一帶の風景は、いかにも我が鹿兒島市のそれに髣髴たるものがある。その昔豊臣秀吉が薩摩入りの折、今の磯風景樓の邊から錦江の風光を賞しながら

島か富士こゝが清見ヶ寺にして

洲崎の濱は三保の松原

と詠じたといはれてゐる。その眞偽は素より知るところではないが、この歌そのまゝに、如何にもよく似てゐるのが、我が錦江の風光と、こゝの風景である。自分は身故山に在るの思ひをして、朝の海を眺めながら、暫時こゝを去るに忍びなかつた。

清見寺を去つた足をそのまゝ園藝試験場に運んだ。偶然にも玄關口に迎へて呉れたのが谷川技師、谷川君は中學の同窓である。東京府立第一中學校で自分より一級上であつた。お互近所に住つてゐたので毎日通學を共にした。而も卒業後は面會の機會なく三十年を経過した。今日久しぶりに會つて見ると鬢髮既に白きを加へてゐる。それもその筈、長男が

もう母校の一中に在學してゐること、今更ながら自分達の年のいつたことに氣がつく。

場内小高きところに吉野櫻の植込みがある。先年アメリカのタフト夫人が來朝の際、東京市から櫻の苗を土産に贈つた。然るにその苗木に害虫が付いてゐるといふので、はる／＼太平洋を横切つて運ばれたにも拘らず、法の命ずるところにより、上陸の際悉く焼却されてしまつた。それでは日本の面目にかゝるといふので、更に當試験場に於て新しく健全な苗木を養成し、害虫の驅除を完全にして送つたのがワシントンに植ゑられ、今日ではアメリカの首府を飾るにふさはしいあの美しい日本櫻となつたのである。而もその際幾分こゝに残されたのが、これこの通り大きくなつたのだとは谷川君の説明。まことに面白いエピソードではある。

午後は更に自動車を驅つて江尻清水を経て、三保の松原に羽衣の松を賞した。江尻は自分にとり忘るゝことの出来ない思出の土地である。明治三十八年の夏、札幌を出で、初めて學生服を背廣に着換へたときである。歸省の途次、こゝに避暑中の金森さんを訪ね、多數の家族達と共に一週日を遊び暮した。

「東郷さん、ほんとに立派な紳士になりましたネ、背廣がよく似合ひますよ」と金森夫人にほめられて、きまりが悪かつたのもその時であつた。さうして沖に鯨の浮游してゐるのを見て

鯨潮吹きわしやホラふきよ

三保の松原風が吹く

なんて駄句つて見たりして喜んだのもその時であつた。

圖南の大志を深く胸に秘めながら校門を出で、社會人としての第一歩を踏み出したその際、こゝに一週日を暮し、朝夕富士の靈山を望みながら、この身の將來に幾多の空想を驅せたこと等を次から次に追憶しつゝある間に、自動車はこの身をいつしか三保の松原に運んで呉れた。

三保の松原に繪の様なああ美しい昔の物語を思ひ浮べながら、すが／＼しい氣持になつて、遙かに富士を眺めた。秋晴れの空にくつきりと立つたああ秀麗な姿を見たとき、我々の心は、すっかり淨化せられてしまう。自分は我國に富士を有することの幸福を感謝せず

にはみられぬ。

政戦に没頭し、寸暇なきこの頃の生活、その多忙の中から小閑を得たこの楽しみ、『閑有趣』とは實にこのことである。夜に入りては再び舌戦に従はねばならぬ。我々はどうしても勝たねばならぬ。さうしてあの富士の高嶺そのまゝの美しい政治、正しい政治を我國に確立しなくてはならぬ。これが私達の任務である。さうだ大に戦はう、闘つて大に勝利を得よう。

共 樂 亭

白河の南湖は、松平樂翁公の開鑿に係り、我國公園の鼻祖なりと稱せられてゐる。その南湖公園に『共樂亭』と稱する小さな建物が、今に保存されてある。これは樂翁公の創意に成り、たつた『一と間』しかない建物である。公は家臣の人達と共に、時折こゝに駕を枉げ、南湖の風光を賞しながら、その日を打ち興ぜられたといふ。

君臣の別嚴然として存した封建時代に、たつた一と間しかない家屋を建て、日頃は敷居越しでなければ、ものも云へない家臣達と、時折群居同席するの機會を作り、上下和親の空氣を遺憾なく醸成されたところに、いふべからざる教訓を感じるのである。

私は、昨秋講演行脚の途上南湖に遊び、親しく共樂亭を訪ねて、名君在世當時の面影を偲びながら、感慨無量なるものがあつた。

デモクラシーといへば、直ちに歐米諸國の專賣品であるかの如く考へる人が少なくない。併し我國の歴史には、デモクラシーの潮流が、古くから絶えず流れてゐたことを忘れてはならぬ。即ち樂翁公の『共樂亭』は、確にこの思想の如實に現はれたものゝ一つである。

君臣同席の間に談笑するといふことは、今日から見れば何でもない様なものゝ、當時にあつては非常に英斷であつた。さりながら、共樂亭は決して『無禮講』『無差別』『無秩序』を意味するものではない。君臣自ら分あり、長幼自ら序あり。斯くて初めて眞のデモクラシーは、その精神を充分に發揮し得るのである。この意味に於て、共樂亭の精神を今日の日本に飽く迄も徹底し度いものである。日本全國を一つの共樂亭に造り上げ度いものである。政治も經濟も、總てその基調をこゝに置いて新日本の創造に努力し度いものである。

私は共樂亭の前に立ち、往時を追想しながら、かう考へて見た。さうして、更に臺灣在住當時に體驗した『便所のデモクラシー』に思を馳せて見た。

それは臺灣總督府の新廳舎が完成して、舊廳舎から引越をした當時のことである。バラック建の事務室に長い間、鼠と共同生活を營んで居た私達にとり、新廳舎は確に大きな驚異の一つであつた。貧民窟の住人が俄に殿上人になつたと同じやうに、そこには色々の悲喜劇が、ひつきりなしに演ぜられたことも事實である。

我國最初の試みだといはれた、鐵筋コンクリート四階建の大建築物、それが總督府の新廳舎である。而も各階の四ツ角毎に設けられた、あの立派な便所、雪のやうに眞白い大理石の板、眼も醒むるやうな美しいモザイクの床、さういつたやうな物から成り立つてゐる、あの半西洋式の便所、可なり廣く世界の國々を走り廻つて來た私達にも、綺麗に見えるあの便所。恐らく多くの人達にとりては、一つの大きな驚異であり、さうして初めて、あの便所に這入つたときには、恐らく總ての人の尻がこそばゆかつたことと思ふ。

而も、更にその便所が總督以外の總ての人に、平等に開放せられたことに就て、私達は一種の好奇心をそゝられた。兎もすればアリストクラシーの色彩を濃厚ならしめんとする植民地でありながら、そこには上下の區別もなければ、男女の差別もない。所謂閣下の用便が終つた直後に掃除苦力のチャボランが用をたす。若い行燈袴と入れちがひに、血の氣の多い男の役人が這入るといふのが、その實狀である。世界廣しといへども、これ程開放

的な、さうしてこれ程デモクラチックな便所は恐らく外には類例がなからう。

四民平等、男女同權、一視同仁、かういつたやうな言葉が、新廳舎に於ける便所の實狀を表現するにふさはしい言葉であつた。さうして、私はそこに「便所のデモクラシー」なる新熟語を發見した。併しそこには、多くの悲劇喜劇がたわいもなく演ぜられた。手洗場を男用便所と間違へ平氣で小用を便じてゐた人があるかと思ふと、大きな用便を済した後の始末方を心得ず垂れ流しにしてゐた役人も少くはなかつた。

どの便所にも、黄金色の死骸が累々として、うづ高く横はつてゐるのが、その頃の實狀であつた。私はその當時、『便所の戸別訪問』をして見たが、一つとして死骸の横はつてゐないものゝないのに閉口した。併し別に名案も浮ばなかつた。そこで止むなく、人の残して置いた大きな死骸を先づ片付けてから、自分の用をたしたことも、二度や三度ではなかつた。

貧民窟から俄に殿上人になつたやうな氣持のした私達の前に、眼も醒むるやうな立派な便所、而も嘗て見たことも無いやうな半西洋式の便所が、平等に解放せられたとき、かうした悲喜劇の頻發したのは無理のない話だ。

デモクラシーは、凡ての場合に於ける人類最後の、要求であり、理想である。併し之を與ふるには、先づ之に對して豫備的知識を授けることが必要である。之を得んとするには先づ之に對し適應し得る丈けの豫備的訓練を受くることが必要である。この必要な知識と訓練との缺けた場合に於て、デモクラシーは、悲劇の種であり、喜劇の源である。斯くて私達は眞のデモクラシーを、新しい總督府の便所に發見せずして、寧ろ古い白河の共樂亭に發見するのである。

何でもないやうな便所一つでさへ、かうした教訓を私達に與へることを思ふとき、私達は大に考へて見なければならぬ。暑い夏の眞盛りに話が臭い便所に落ちるなどは、随分物好きのやうにも聞える。併し、私としては、そこに大なる意義を有するつもりである。

便所のデモクラシーによつて得た、この教訓は、人生の凡有方面に適用が出来る。即ち政治に於ても同様である。政治を便所と同一視するのはけしからぬといふ人もあらう。併し結局は同一である。況んや、銅臭紛々たる我國今日の政治は、正に便所以上の惡臭に飽

和されてゐるのではないか。私は現に黨人である。故に政治に就てはこれ以上茲には何もいはぬ。どうか諸君、自ら毎朝便所に這入られた場合に、この重大問題に就て靜かに思を廻らして下さい。さうすれば、自から最後の政治的結論に到達せらるゝであらう。

北、白河に『共樂亭』を見、南、臺灣に『便所のデモクラシー』を體驗した私達は、更めて現代日本の社會的實相を直視して見なければならぬ。昭和の國是は『日に進み、日に新にする』に在る。併し『進むや、その序に循ひ、新にするや、その中を執る』ことを忘れてはならぬ。そこに私達の進むべき正しい途があり、私達の創造せんとする新日本の基礎的資料が嚴存するのである。

私達はデモクラシーを外に求めずして、これを内に求めなくてはならぬ。建國以來、我國の歴史を一貫して、淀みなく流れて來たその思想を基礎とし、そこに眞のデモクラシーを創造し、日本の國家を眞に幸福なる『共樂亭』たらしむべく、大に努力しなくてはならぬ。

日本は何處へ往く

日本は何處へ行く？

それはむづかしい問題だ。併し日本の行先は『天國』か『地獄』か、この二つ。さうして日本が今のまゝ、コースを變へることなく進むならば、結局『地獄』に落ち込むのが、その運命であらう。

人の心の中には『誇大性』と『批判性』とが共存してゐる。誇大性は自然を支配せんとする力であり、現實の生活に甘んぜず、より以上進んだものを想像する力である。然るに批判性は、この想像を打消して、現實に則し、自然をそのまゝ赤裸々に觀んとする力である。さうして誇大性の極端に表徴せられたものが『神』であり、批判性を極度に表徴したものが『惡魔』である。即ち前者は『神性』であり、後者は『獸性』である。

如此、人の心の中には、何處までも人間を理想的に向上せしめんとする神と、絶えず人間を醜惡なる現實に引き落さんとする惡魔とが共存してゐる。さうして人間が神の力に支配されることの強い場合には、その人は「善人」であり、惡魔の力に支配されることの多い場合には、その人は「惡人」となる。更に一國の文化が、その國を組織する國民全體の心の表現なりとすれば、神の力の強い場合には「精神文化」を生み、惡魔の力が強ければ「物質文化」の現はれとなる。

例の産業革命に亞いで驚くべき發展を遂げた歐羅巴文化は、實に「惡魔の文化」であり、黃金萬能の「本能的物質文化」である。而もこの物質文化は凄まじい勢を以て全世界を吹きまくつて餘すところがない。

一も西洋、二も西洋、西洋模倣に終始一貫して出來上つた日本の新文化は、同じく惡魔の文化である。さうして「金」が總てのものを支配するといふのが、我國現下の實相である。政治が文化の一要素である以上、我國の政治に就て、その實相を探究するならば、我國文化そのものゝ全貌を窺ひ知ることも出来る。

醜惡なる物質文化の縮圖とも見るべきはゲーテの傑作ファウストの前編である。而もこの物語を生地のまゝ演じてゐるのが、我國政治の現狀ではなからうか。

惡魔に魅られたファウストが、物質の魔力を以て、純潔玉の如き處女マーガレツテを墮落に導き、戀の勝利者として、思ふがまゝに戀の甘きを味ひ盡し、遂には嬰兒殺の科に依つて可憐の少女を牢死せしむるに至つたのが、ファウストの前編である。而も我國現下の政治がファウストの前編そのまゝとするならば、日本の行先は地獄の外になからうではなからうか。

『試験地獄』『貯金地獄』……色々の分家地獄が山程あるのが、我國の現狀なりとするならば、そこに地獄の本来本元たる『政治地獄』の存在しない筈がない。而も身自ら『政治地獄』の谷底に落ち込んでゐながら地獄の存在を自覺しない者の多いのが不思議である。地獄は未來のものにあらずして、現世のものである。國民の現實生活そのものが、直ちに『天国』でもあり『地獄』でもある。

國民の教育が進んだ、政治的自覺が發達した。さう云ひながら普選が實施された。而も

過る府縣會議員選舉で、無茶苦茶に踏みにじられてしまつたのが、普選の精神であつた。

國民の『人格』に與へられた普選の權利が『物質』に與へられた舊選舉權と同じく依然として權力と金力とに屈從したのが、選舉の實際であつたとしたならば、何によつて吾々は混濁の政界を革正することが出來よう。かうして自覺なき國民の多くは惡魔に引きずられながら、一步々々恐るべき『地獄への道』を辿り行くのである。

鐵道も、港灣も、道路も、總て黨略本位で決定するといふのが、我國今日の政黨政治であるとしたならば、それは悲しむべきことである。鐵道欲しさの弱點に付け込んで、うまく釣るのが政治家、さうして、その口車に乗り易いのが一般國民。斯くて國民道徳は日に頽廢して行く。而もその罪は乗る者よりは、乗せる者に在りといはねばならぬ。

黨勢擴張の爲めには、借金を質に置いて鐵道をかけてやるといふ筆法が、極端に進んだならば、聽て日本の財源は『火の車』になるだらう。さうして特に火の車に乗ることを喜ぶのが惡魔である。

臺灣では汽車のことを『火車』^{ホイシヤ}といふ。今に日本全國津々浦々に至る迄『火の車』がレールの上を盛んに走ることになるであらう。さうして惡魔といふ運轉手に引きずられながら、無數の乗客——國民——を乗せて走る『火の車』が、聽て到着すべき最終の驛名は『地獄』である。

日本は何處へ行く？ このまゝで進めば、その行先は地獄だ。日本將來の運命が、單に地獄行以外にないならば、それもよからう。併し吾々は別に日本の行くべき『天國』のあることを忘れてはならぬ。

人の心の中には、常に神と惡魔が共存してゐる。夫の宗教革命家として盛名を馳せた、マルチン・ルーテルさへ妾を蓄へてゐたといふ。ファイエは彼を評して『ルーテルは俚諺、麥酒及婦人を愛し、同時に熱烈なる信念を有し、常に惡魔と地獄とを恐れた』といつてゐる。斯くの如く神性獸性の二を併有してゐるのが、人間でありとするならば、獸性の著しく表現されてゐるのが、我國今日の政治的實現である。吾々は速に神と共に清く正しく生きんとするの努力に目醒め、飽迄惡魔と地獄とを排撃し、我國の政治を公明に導かねばならぬ。

政治は現實のものである。併し餘りに現實に則した政治は、悪魔に支配せられ、ただ『火の車』を走らすべきレールを敷設して『地獄への道』を開くに過ぎない。吾々は、無論空ばかり見つめてゐる譯には行かぬ。吾々の足一度大地を離るゝとき、吾々は『人』としての力を失ふ。故に吾々は飽迄も現實の大地をしつかと踏みしめながら、常に天上の神を心として、精神に則した力強い政治を行はねばならぬ。

山は高い、併し山よりも高きは天である、その天よりも尙ほ高いのが人間の理想である。吾々の政治に理想あるとき、初めて『政治の天國』を発見することが出来る。吾々は『金』に汚された我國の政治を、速かに悪魔の手から奪つて、神の手に移し、之を洗ひ清めて、そこに公正なる『人格政治』を確立しなくてはならぬ。さうして吾々の祖國日本を『天國』の殿堂に導くべく、『無限階段』の建設に取りかゝらねばならぬ。

若し八千萬國民の或者が、依然として金權政治を讚美し、『地獄の沙汰も金次第』金さへあれば地獄はないと考へ、飽迄も悪魔に引きずられて、日本の國を地獄に導かんとするならば、吾々は彼等に『置いてけぼり』を食はせ、御先に御免を蒙つて、神と共に日本の國を天國に導かう。

日本は何處へ行く？ このまゝ進めば『地獄』に落ちる。故に吾々は政界革新の義軍を起し、日本の行くべき『天國への道』を速に完成しなくてはならぬ。

一 等 國

船に一等室、二等室、三等室がある如く、國にも一等國、二等國、三等國がある。さうして我日本國は現に世界の一等國であるさうだ。

船の等級、國の等級、所詮は相對的のものであつて、絶對的のものではない。同じ一等室であつても、船によつてその内容は千差萬別である。また同じ一等國にしたところが、その實質には、國それ／＼の相違を有するのが當然である。

去る十一月六日は夜半のこと、自分は遊説行脚の爲め、鹿兒島から種子島行の汽船に乗り込んだ。船の名は富江丸、二百噸にも足らぬ小蒸汽船ではあるが、矢張り一等室もあれば、二等室もあり、三等室もある。

疊一枚敷程の狭い室の兩側に、上下二段になつたベットが四つ並んでゐるのが、この船の一等室である。一行四人、早くも船室は満員になつてしまつた。而も大男ぞろひの一行が、洋服を寢巻に着換へる段になると、舷々相摩して、その窮屈さは、實に名狀すべからざるものである。それでも入口にはチャンと『一等室』の表札が立派にかゝつてゐるから一等室たることに間違ひはない。

餘りの窮屈さに、この室を飛び出した自分は、そつと二等室を覗いて見た。まことに廣くとした室だ。そこには西洋式のベットもなければ、段通も敷かれてゐない。併し室一面に敷かれた疊の上には、多數の船客が一樣に枕を並べて雜魚寢をしてゐる。そこには何等上下の差別もなければ、窮屈さもない。自分はこの有様を見て眞に幸福な人達だと考へた。更に三等室に降りて見た。二等室を何層倍にもしたといつた如うな大廣間である。そこに何等の不安もなく、平和なさうして平等な氣分を飽くまで漂はしてゐるのが、三等の諸君である。自分はこの美しいデモクラチックな空氣を思ふがまゝに呼吸し得る人達の幸福を心から讚美せざるを得なかつた。

一等室に歸つて來た自分は、この長い體軀をベットの上に横へながら靜かに考へて見た。

さうして富江丸の一等船客になつたこと不幸を今更痛感せざるを得なかつた。

西洋模倣のせゝつこましい船室、それが富江丸の一等室である。高い賃金を拂つて、二等室や三等室よりも遙かに窮屈な思ひをするといふこと以外に何物もない一等室、その一等室に寝て行かねばならぬ運命に置かれたことを思ふとき、自分は一種の悲哀を禁じ得なかつた。うらやましいのは二等の人達であり、三等の諸君である。

自分は更に嘗て経験した臺灣航路、歐洲航路、太平洋航路、乃至は大西洋航路、其他に於ける諸汽船に思を馳せて見た。

これ等諸汽船の一等室を富江丸のそれに比較して考へて見たとき、その相違の餘りに偉大なるに驚かざるを得ない。併し大西洋航路に従事する最優秀船であらうが、一等室は矢張り一等室であり、種子島通ひの小蒸汽船であらうが、一等室は依然として一等室である。たゞその内容實質に兩者霄壤月離の相違があるのみだ。前者に乗り込んだ船客が一等船客なら、後者に乗り込んだ船客も同じく一等船客である。一等船客たることに於て何等差別はない。

併し前者が宏壯美麗なる宮殿に享樂せる王公の如き氣持であり得るに反し、後者は狹隘至極な牢獄に捕はれた罪人の如き窮屈さを感じざるを得ない。そこに内容的の相違があり實質的の間隔がある。而かも牢獄に捕はれた罪人の如き思ひをしながらも、尙ほ且つ一等船客であることを誇りとするのが、現代人の心理なりとするならば、これ程悲しむべきことが、他にもあるだらうか。

日本は世界の一等國であるといふ、まことに結構なことだ。併し日本の一等國は恰も富江丸の一等室に彷彿たるものではなからうか。

最近數十年の間、絶えず西洋の文物を輸入した日本の新文化、一も西洋、二も西洋、西洋模倣に終始一貫したのが、明治大正を通じての日本の歩み方であつた。そこに形ばかりの一等國が立派に出来上つた。

疊一枚しかない御座敷の兩側に、西洋式のベットを取り付けた富江丸の一等室を見る様な氣持のするのが、日本の一等國である。さうしてこの國に居住する人達は一等國民の體面を維持する爲めに、多額の負擔を荷ひ、而も窮屈極まる生活を續けなければならぬ。こ

れが一等國日本の現状である。どこに一等國の内容實質が発見さるゝであらうか。

かうなると、もつと、のび／＼した氣樂な生活を營んでゐる二等國三等國が寧ろうらやましくなつて来る。國土は狭い、人口は多い、職業がない、食糧が足らぬ。これが一等國日本の實狀である。吾々は日本の行末を靜かに考へ、眞面目に慮つて見なければならぬ。

日本が一等國である如く英米諸國も、亦た一等國である。而もその内容實質に於て英米諸國が遙かに日本を凌駕してゐることを思はねばならぬ。

英米諸國が大西洋航路に於ける最優秀船の一等室でありとすれば、我日本は種子島通ひの小蒸汽船の一等室である。一等室たることに變りはないが、その内容實質に於ては雲泥の相違である。それでも吾々日本國民は一等國民なりと誇り、世界の三大強國なりと自惚れてゐる。

英米兩國と共に日本は世界の三大強國だといふ。併し同じ相撲の横綱でも、東京と大阪とでは、その實力に可なりの開きがある。日本が世界の三大強國たる所以のものは、その地理的位置が東洋に邊在せるが爲めである。即ち日本は大阪の横綱たるに過ぎない。而も

横綱の美名に酔うて、その實力を養ふことなくば、遂に世界といふ大きな土俵の上で見苦しい程の惨敗をなすに至るであらう。

吾々の愛する祖國は『日本丸』である。此の日本丸をして大西洋航路の最優秀船たらしむるも、又種子島通ひの小蒸汽船たらしむるも、そは一にこれが乗組員たる八千萬國民の努力如何によることだ。

一等國日本の現状が眞に富江丸の一等室そのまゝであるとするならば、吾々はその悲しむべき境遇から、速に脱却すべく最善の努力を致さねばならぬ。

三等室よりは二等室、二等室よりは一等室！ 更に三等國よりは二等國、二等國よりは一等國！ そこに初めて國民の向上的發展の意氣を発見し得るではないか。

將來に残されたる吾々八千萬國民の一大使命は名實共に眞に『世界の一等國日本』を完成することではなからうか。

彰化一年有半の思出

私が社會生活へ踏み出した草鞋の紐を最初に解いたのが彰化であつた。明治三十九年二月の初め彰化廳囑託として任に赴いた私は、彰化到着の當日、直ちに八卦山に連れて行かれた。さうして彰化街のあの赤瓦の屋根を見下したとき、私は思はず涙がこぼれた。

青雲の志をいだきながら、札幌の校門を飛び出して來た二十六歳の青年、その若人がくり廣げた實生活の第一ページが、この地であることに氣が付いたとき、私は情けなさを感じひとしきり涙にくれた。併し涙に亞いで湧き出でたものは私の強き決心であつた。『眼下に際限なく廣げられたあの水田からは五十萬石の米がとれるのだ。自分は五十萬石の大名になつた氣分で彰化廳の農事開發に若き心の總てを傾倒しよう。』かう決心したとき、私の心は光風霽月、そこには曇りの片雲だになく、非常な意氣を以て山を下りた。

斯くてその翌年總督府に轉するまで在任一年半、自己の使命を全うすべく常に喜悅に満ちた努力の生活を續けることが出來た。私の臺灣生活十八年、最も自己を意識し自己に依つて生存するの心地よさを感じたのは、實に彰化の一年半であつた。

一年半の歲月は夢の間である。併しその間、臺灣に於ける農會發展の若芽がこの地に伸び出で、更に彰化水源地を縁に色彩つてゐる八十町歩の想思樹造林の種子がその時播き下されたこと等を思ふとき、なつかしきことの數々が次から次に湧き出で、來て、懷舊の情禁じ難きものがある。

更らに役人として、その本務を全うすることの外に、或別個の使命を帯びてゐた自分としては、可なりの努力を續けた。時折閩々の情に堪へず、當時愛讀書の一つであつた、土井晚翠の詩集『天地有情』をひつつかんで八卦山にかけ上り、聲高らかに歌ひながら、心の悩みを偉大なる自然の手に委せたことも數知れぬ程であつた。

或晩、眞暗な街の小路を足取りをかしく歩み行く私の後から、杖を便りにやつて來た盲目の按摩が何の苦もなく私を追ひ越して行くのを見て、私は今更ながら目明き者の不自由

さを痛感し、非常な教訓を得たことであつたのもその頃であつた。

當時の思出を書けば數限りもない。併し私は茲に過去を語るのが目的ではない。私は今や漸く政界に駒を乗り入れたばかりの若武者である。さうして私の今の氣分は恰も二十有餘年前、官海に初めて船を乗り出したときと少しも變りがない。従つて彰化一年半の官場生活は、私の今の政治的生活に取りては、思ひ出の種子である。

昭和三年は總選舉の行はるべき年である、然り普選に依る第一回の總選舉が行はるべき年である。私は普選により我國から金權政治と權力政治とを排撃し眞に大衆を基礎とした立憲政治を確立し度いものだと思ふ。さうして私は嘗て彰化に於て自己の使命を果すべく努力したときと同じ様な純眞さを以て混濁の政界を革新すべく努力して見たいと考へる。

即ち私が昭和三年の初頭に方り、彰化一年有半の思ひ出を綴る所以のものは過去に生きたが爲めにあらずして、實に將來に生きたが爲めである。これに由て若き強き正しき力を新しく得んが爲めである。……我國政界革新の爲めに。

二つの力

普選第一回の總選舉は、これを月並にいふならば、確に無事に終へたともいへる。併しその實際は、必ずしも無事ではなかつた。

申すまでもなく、新選舉權は貧富の差別なく満二十五歳以上の男子に平等に與へられた權利である。故に『物』に與へられ、『金』に與へられた從來の制限選舉權と異り、實に國民の『人格』そのものに與へられた權利である。従つて今回の總選舉は、有権者各自の人格的判断により自由公正に行はるべき筈のものであつた。然るに選舉の實際は、舊態依然として『權力』と『金力』とが、その暴威を逞うし、普選の第一ページは惜し氣もなく汚がされてしまつた。即ち時代を理解しない舊式政治家の土足にかゝつて、普選の大精神が見る影もなく踏みにじられたことは、確かに憲政の一大逆轉であつて、聖代の不祥これに

過ぎるものはない。

110

筆者も政戦に従事した一人として、審さにこの憂ふべき事實を體驗した。即ち筆者が立候補の届出を済したその晩から、筆者の自宅附近には絶えず或魔の力が潜んでゐた。さうして筆者の動くところ、必ず影の形に添ふが如く、その忌はしい魔の力がつきまとつた。

公正自由なるべき筈の選挙海に乗り出した筆者の『普選丸』が、氣象學のどの本にも書いてない様な不思議な低氣壓の發生に悩まされたことは、二度や三度ではなかつた。併しながら、筆者は常に『荒い浪ほど、静かにうけて、舵に心を沖の舟』といふ小唄を處世の指針としてゐる一人である。この氣分をよく呑み込んでゐた運動員諸君は、押し寄せて來る荒浪を、やんはりと受け流しつゝ、『普選丸』の操縦に、萬遺憾なきを期して呉れた。

時候外れの低氣壓が、如何に暴威を逞うしても、筆者の船長としての『確固たる信念』は微動だもしなかつた。また、引つ切りなしに押し寄せて來る猛烈な『氣ちがひ浪』も、飽くまで『普選の精神』に目醒めた船員——運動員——の逞ましき兩腕にしつかと握られた『正義の舵』を奪ふことは出来なかつた。斯くて筆者の乗り込んだ『普選丸』は處女航海ながら、何等豫定の進路を變更する必要もなく、悠々として普選の海を進みつゝ、當初の目的を遺憾なく達成することが出来た。

今、航海の跡を靜かに顧みると、勝利の誇よりは寧ろ『氣ちがひ浪』の不愉快さを痛感する。併し悪魔に支配さるゝ總ての力は、遂に神と共に強く正しく清く歩む者から、何物をも奪取することは出来なかつた。そこに勝利者としての限りなき眞の喜びを覺ゆる。

かうした不愉快な力の壓迫を體驗したかと思ふと、その反面には、涙に餘る様な貴い力をも充分に味ふことが出来た。これも確に普選當然の賜であらう。即ち去る二月二十六日の鹿兒島新聞は『普選の挿話』と題し、次の如うな記事を掲げてゐた。

『惠まれた普選の貴き一票を惡戯書して開票立會人を失笑せしむる不心得者さへ尠くないのに、これはまた何と美はしい事か、頑是ない子供等が神詣して、父親達の擁立してゐる候補者の當選を祈願したといふ話がある。

噲啖郡岩川町川崎千奴氏は東郷候補者の運動員となり、晝夜東西奔走して愛兒たちの顔を見ることもなく、數日を過したが、いよゝゝ戰機迫れる或夜のこと、偶と子供達の

111

枕の下に候補者東郷博士の名刺が入れてあるのに気がついて、その理由を訊ねて見た。すると娘ミチ(一一)とその弟の周治(八つ)の兩人が、母親から東郷氏の話や、父君等の苦心を聞いて、子供心にも大いに感じ、毎日々々村の氏神八幡神社に詣で、東郷氏の當選を祈願し、枕の下にこの名刺を入れて一心に念じてゐたものであるとが判明した。斯くて、父親千代氏を始め、如何なる強敵をも恐れぬ東郷氏や、運動員達も皆泣かれたと」話の筋は大體右の通りである。即ち赤地に白く『東郷實』と染め出された宣傳用の名刺ピラが路上にふりまかれたとき、それを拾つた子供達は、その何物であるかを母君にたづねた。母君からそのわけを審さに説き聽かされた幼き二人は、その日から筆者の勝利を、日夜神に祈つて呉れた。斯くて『小さき者』の強く正しく清き力は遂に神に通じた。筆者最高點當選の裏面には、かうした涙ぐましい『同情の力』が潜んでゐた。猛烈な悪魔の力を物の數とも思はない筆者も、天使の如うな小さき者の力にはほんたうに心の底からにじみ出づる涙を、どうすることも出来なかつた。

筆者が感激に満ちた心持で、この愛すべき子供達を訪ねたのは、二月二十七日の夜であつた。さうして二人をかはるがはる抱き上げ、洋々たるその前途を祝福し乍ら、翌日は早くも郷里を後に歸京の途に就いた。

東京の留守宅に、父の歸りを今や遅しと待ちかまへてゐた三人の子供達は、筆者歸着のその日、何よりも眞先に、この美はしきエピソードに就て、その真相を物語れと迫つた。さうして鹿兒島新聞を読んで、うれしさの餘り、その晩早速二人の御子達に眞心こめた御禮の手紙を差し出したことを告げ、更に自分達も父の當選を神に祈り續けて來たことを、うれしさうに話して呉れた。

筆者が政戦にスタートを切るべく、東京を出發したその日から、選挙當日迄、雨の降る日、風の吹く日、それさへいとはず二十四日の間、長男は明治神宮に、長女と次男とは櫻田神社に、日参以て、父の當選を祈願したといふのが、子供達の告白であつた。

子が親の爲めにする祈願、そこには何等の不思議もない。併し筆者は、子供達の眞心こめた神への祈願を涙なしに聽くことが出来なかつた。筆者は子供達のこの美はしい眞心に對し、親として、否人間として心から感謝せずにはゐられなかつた。

今回の選挙戦に筆者自ら体験した二つの力、その一つは『悪魔の力』であり、他の一つは、『神の力』であつた。前者は舊式政治家を通じて『権力金力の壓迫』となつて表はれ、後者は小さき者を通じて『正義同情の美果』となつて現はれた。さうして『普選の名花』を蕾のまゝ泥土に踏みにじつたのが前者であり、『普選の美果』を立派に實らしたのが後者であつた。

選挙の結果を見て驚いたのは神にあらずして、悪魔であつた。然るに今尙ほ悟り得ず、依然としてその醜き惱みを續けてゐるのが、彼れ悪魔である。故に吾人は『選挙界の革正』と『人格政治の確立』とを實現すべく、速に我國の政治を悪魔の手から奪つて、これを神の手に移さねばならぬ。我國現下の最大急務は實にこの一事である。……但しそれには、八千萬國民の總てが、先づ『小さき者』と同じ心——強く正しく清き心——に目醒めねばならぬ。『神の心』に甦らねばならぬ。斯くて昭和維新の大業も、始めてその第一步を踏み出すといふものだ。

—昭和三・四・三—

民族的藝術の殿堂

『浮世繪』の展覽會が、報知新聞社主催の下に、今日から上野の美術館に開かれた。私も多忙の中に寸暇を得、招待日の初日に馳せ参じて見た。

繪に對する鑑賞眼は全然持ち合せのない私、たゞ好きだといふことのみにより、帝展、院展その他美術に關する展覽會には、東京に居りさへすれば、必ず出かけて見るといふのが私の道樂、昨年東京朝日新聞社主催の『名作展覽會』を觀て、その感想を貴紙に報じたことがあつたが、それと同じ氣分で、今日觀た浮世繪展に關する感想の一端を書いて見ることにする。

第一室から第十室まで、版畫、肉筆畫、數限りもない浮世繪の逸品傑作が、ズラリと並んだその有様は、確に世界的驚異の一つである。私は日本固有の藝術的殿堂が、今報知社

の努力により、國民の前に開放せられたことに對し、深厚なる謝意を表すると同時に、こんな民族的藝術品を一部富豪の獨占到任せず、永久的美術館を設置し、一般民衆の鑑賞に便ならしめ、外國への流出を防ぎたいものだと思へる。

南畫、文人畫、何れも支那の流れをくむだもの、よし、それが散逸したところで、それ程の悩みは感じない。更に西洋模倣の油繪、水彩畫、それもなければならぬ、すまされぬこともない。併し浮世繪に至つては、さう簡單に片付ける譯には參らぬ。浮世繪は我國獨得のものである。日本人の手によつて、日本の土地に播き下され、そこに芽生えを生じ、そこに成長し、遂に世界的藝術となつたのが浮世繪である。而もニューヨークや伯林にその逸品を觀ながら、未だ嘗てそれを日本に觀ることの出来なかつた私に取り、今日の機會は何といふ悦しさであらう。即ち私は今親しく浮世繪の前に立ち、近頃のない心の晴れ晴れしさを感ずる。

學問も、思想も、美術も、政治も悉く、西洋模倣に終始一貫してゐる現代日本の陰鬱なる世相に、すつかり氣を腐らしてしまつてゐる私、殊に昨今の無責任極まる政治家の不愉快な態度に憤怒を禁じ得ない私、今日圖らずも日本人の『民族精神』を遺憾なく表現し得た『藝術の殿堂』にこの身を發見したとき、心に抱く凡ての不滿を一掃し得て、自分ながら、近頃のない愉快さを感じた。日本が生んだ唯一の民族的藝術——浮世繪——を通じて徳川時代の爛熟した文化の有様、當時の人情風俗、現代に顧みて得るところが決して少くない。

現代の日本は外を觀ること餘りに急にして、内を顧みるの餘裕がない、そこに今日の憂ふべき世相の實現がある。日本の新文化を進める爲めには、無論海外に學ぶことも必要だ。併し彼に學ばんが爲めには、先づ自己を反省することが、より以上に急務ではないか。

瀧本誠一博士が先年徳川時代の經濟學說を一括し『日本經濟叢書』三十六卷を完成し、今や更にこれに加ふるに上王朝時代より下明治時代に至るまでの經濟書類十七卷を以てし『日本經濟大辭典』五十三卷を刊行せんとしてゐるのは、この意味に於て國家の爲め慶賀すべきことである。私達はマルクスを讀む前に、先づこれ等日本の經濟學說を究めねばならぬ。斯くて自己反省の機會は、自から經濟學徒にも到るの日があるであらう。……

報知社今回の計畫は同じく現代の日本國民に藝術的自己反省の機會を與ふるに力強きものであらう。……『淺薄な模倣より速かに質實なる創造に歸れ』これが日本をして民族的藝術に復活せしむる所以ではないか。

一國の文化を組織する各種の要素、即ち言語、宗教、美術、文學乃至制度等は悉くこれを完成した民族の有する獨特の『民族精神』の外的表現である。この原則を自覺したとき初めて眞の日本文化も完成することが出來よう。學問に、藝術に、自己反省の機會が近年國民の前に展開されて來たことは、確に一大進歩である。併し更に政治的反省の機會を國民一般に與ふることは、より以上の急務ではなからうか。

— 昭和三・六・六 —

義 務

『權利』と『義務』この二つは對句であつて、決して單句であつてはならぬ。然るに現代人は、徒らに自己の權利のみを強調して、その當然果すべき義務を忘れてゐるのではなからうか。そこに吾人は現代世相の大なる缺陷を發見せざるを得ない。

『法律』は單に權利の擁護者であつて、義務の指導者ではないやうな感じのするのが、我國今日の實相である。即ち我憲政史上特筆大書すべき普選の實施も、吾人に少からぬ無理を感じしめたるが如き、斯間の消息を明かに物語るものではないか。

吾人は『參政の權利』を主張する前に、先づ『參政の義務』を自覺しなくてはならぬ。衆議院選舉法第二章の『選舉權及被選舉權』は總て『選舉義務及被選舉義務』に改むべきである。選ぶ者、選ばれる者共に義務に出發して、そこに初めて眞の立憲政治は之が完成

を見るであらう。

紀元前三百九十九年、大哲ソクラテスは七十の高齢を以て獄中に死んだ。彼は毒杯を傾けて静かに最後の時の来るを俟つてゐた。臆て毒が全身を犯したとき、彼は除るに顔の布を取りのけ、弟子のクリトーンを顧み「クリトーンよ、俺はアスクレーピオスに鶏の借りがある。この負債を返すことを忘れてくれるなよ」といつたかと思ふと、そのまゝ彼は、永遠の眠りに就てしまつた。

『義務を果せよ』と弟子達に教へた、哲人臨終の一言、何と貴い教訓ではないか。吾人は總ての國民が、此義務の大精神に徹底するとき、初めてそこに法律を超越した人格の偉大なる力を發見することが出來よう。國民道德の儀表たり、國民精神の指導たるべき筈の總理大臣が、何等責任を解せず、義務を忘却し、國論の一致を無視し平然としてその地位に晏如たるが如き有様で、どうして公明なる政治の實現を期することが出來るものか。……憂ふべきは實に現代政治家の義務的觀念の缺除ではないか。

此場合私事を述ぶるは非禮である。併し公人としての私の氣分を説明せんが爲めの範圍

ならば敢て差支へないと考へる。私は過る特別議會の央げに郷里の父を亡くした。父病篤きも歸らず、更に父死するも葬らず、總てを親戚故舊に一任して喪服のまゝ登院、以て政治家としての義務を果した。『大義親を滅す』とはいへ、この決心は雄々しくも悲しい決心であつた。併し私が涙の裡にも政治家當然の義務を果し得たのは、全く父日頃の教訓に出でたものであつた。

長男に生れた私は十四歳の春、郷里を後に帝都遊學の途に上つた。爾來、正に三十有四年、常に郷里に反き父を顧みるの暇もなく、何等子としての義務を果してゐない。而もこの間、父は私に對し親としての義務は立派に果して呉れたが、親としての権利は露程も要求したことがなかつた。

一昨年末輕微ながらも、中風に犯された父は、萬一の場合を豫期し、私に様々のことを遺言した。而も父は自己の『債務』に關しては事細かに物語つたが、自己の『債權』に關しては一言半句も述べなかつた。私は念の爲め債權の有無をたづねた。父は笑ひながらいつた。『わしにも無論債權はある。併し金を借りる程の人は金に困つてゐる人だ。返せる人

は向ふから返すだらう。返すのは借りた人の義務だ。わしの権利をお前に遺言する迄もないことだ。」

「債務は我れ亡き後といへども、必ず果して呉れよ」と遺言しながら、債権を知らぬ顔にすましてゐる父のこの一言を聞いたとき、私は親子といふ觀念を離れ、人間としての父の尊さを感じずにはゐられなかつた。さうしてソクラテスが嘗て「鶏の借りを返して呉れよ」と最後の言葉を残して逝いた昔語りを思ひ浮べて、涙なきを得なかつた。

私は今期議會央ばに、父病篤しの報に接しながらも、國家民人の爲め總てを抛つて歸國せず、更に父死するも葬らず、一に政治家の使命を全うせんとするの決心を爲し得たことは、全く日頃父より「政治家としての義務、國士としての責任」に就て説き聽かされてゐたその貴き教訓の賜である。……議會を終へ父亡き故郷に歸り、春雨の降りそゞぐその新しき墓標の前に獨り淋しく立つたとき、私は「政治家としての義務を立派に果し得た」との喜びと悲しみとに胸が一杯になつた。……「公人から私人に立ち歸つた私」、とめどもなく流れ出づる私の涙を父も恐らくゆるして呉れたことであらう。——昭和三・六・一〇——

先づその源を清めよ

嘗て獨逸に在りし頃、或日『花の町』^{フムトノシノシタツド}とよばれたエルフルトの町を訪ねたことがあつた。この町の電車は運轉手一人で、車掌無しだ。乗客は運轉臺の後側に懸けてある箱の中に、自ら白銅一枚を投ずる。斯くて乗客の一人／＼が、立派に車掌の役を務める譯だ。

或交叉點で電車に乗り込んだ自分は、例の箱に白銅一枚投げこんで、そのまま座席に着いた。すると乗客中の若い一婦人が「お前はここで乗換へたんじゃないか、乗換へたら賃金はいらぬ規則だ」と親切に教へて呉れた。自分は「乗換へたんじゃない」とありのまゝを答へた。「それなら宜しい、兎角、旅行者は、土地不案内の爲め、損する人が多いから」と、彼の女が付け加へた言葉の中には、エルフルト市民の美はしい心意氣が立派にたゞよつてゐた。

人口九萬もあるといふエルフルトの町、この大きな市街地の電車が、車掌をぬきにしてゐるばかりか、乗客の人格を信頼して、乗換さへ認めてゐるところに、市民の立派な公德心が輝いて見える。

買った乗車券を下車の際、必ず車掌に渡さねばならぬことになつてゐる我國の人達から見れば、ほんとに嘘の様な話だ。市民の公德心により、車掌一人の節約が出来れば、賃金は低下し、市民の負擔は自から軽くなる。そこに氣の付かない日本人は、まことに氣の毒な國民だ。

單りエルフルトに限らず、他の小都會にもこんな例はいくらもある。東洋の君子國日本は、今や世界の一等國になつたといふ。その日本でも、もう少し何とか出来る工夫はないものか。車掌無しの電車經營が出来ぬまでも、乗車券の賣りつばなし位は出来さうなものだ。若しそれが出来ないといふならば、日本は名ばかりの君子國であり、形ばかりの一等國である。

歐米諸國では乗車券の賣りつばなしは、普通のことだ。否な歐米の諸國に限らず、彼等

の植民地に於ても、その實例に乏しくない。人間は疑はれると、却つてその裏をかき度くなるものだ。そこに法網をくゞつて悪事を働く不心得者も出て来る。併し紳士を以て遇すれば猫も杓子も紳士らしくなるものだ。この人間心理を植民地統治の上にも、うまく應用してゐるのが英國である。

英國は、新嘉坡その他の植民地に於て電車の經營上、乗車券賣りつばなし主義を採り、總ての劣等民族をも英本國の紳士同様の待遇をしてゐる。さうして、跣足裸の苦力までが電車の中で紳士らしい公德心を發揮してゐるから面白い。物は總てやり様一つだ。日本でそれが出来ぬといふなら、日本人の公德心は、南洋の劣等民族にも劣るといふ結論になる。それでも日本人は、世界の一等國民だといふのだから、世話がない。

更に最近の新聞紙は東京、上野、新宿等の各驛に備へ付けの入場券自動發賣器に關し、まことに不愉快な事實を報じてゐる。

拾錢白銅一つに對し、入場券一枚が出て来る仕掛になつてゐる以上、自動發賣器の計算は最も正確であるべき筈だ。然るに實際は、過不足常ならずして、一向に算盤が合はない。

新聞の報するところによれば、去る六月一ヶ月を通しての不足額は、金一圓九十八錢であり、多過ぎた月の一ヶ月合計は金九十五錢であつた。従つて差引金一圓三錢の損失を受けたのが營業主の鐵道省である。

拾錢白銅しか、はひらない筈の穴から、三錢といふ計算の出る道理がない。然るに實際は五錢白銅があり、一錢銅貨があり、中には五厘錢が三つもあつたといふ。何といふ情ない話だらう。特に過剰になつた場合でも、最初五厘か五錢を投げこんで見たが、入場券が出て來ないので、改めて、正當な拾錢白銅を投じたといふに過ぎないならば、ごま化す氣持は不足の場合と何等變りがない。慾張つて損したといふのがこれである。

僅か拾錢の金を、ごま化さんとするのは、實に情ない根性である。元來日本人は、もつと立派な清らかな國民であつた筈だ。その立派な清らかな日本人がこの情なさ、その墮落は果して何に基因するだらう。

西洋の物質文化模倣の結果か、否な然らず、若しそれであつたらその本家本元たる歐羅巴諸國に於て車掌なしの電車經營や、乗車券の賣りつばなしは出來ない筈だ。して見れば、

涙なしに聽かれなげなこの情ない日本人の行動は、全く舊道德の破壊に伴ふ公德心の缺乏と、國民精神の頹廢とに歸さなくてはならぬ。

併し拾錢白銅一個のごま化しはまだ罪が軽い。もつとく大きなごま化しが、白晝公然行はれてゐるのが、今日の日本だ。世間では昨今の憂ふべき政界の有様を何と見る。立憲政治に何等理解のない不都合極まる政治家が、大きな顔をして正直な國民をすつかりごまかしてゐるのが、日本の現状だ。公德心の缺乏も、國民精神の頹廢も煎じつむれば、皆その源をこゝに發してゐる。されば先づ其源を清めよ。然らずんば今日の憂ふべき世相は、未來永劫遂に改まるの秋がないであらう。

精神文化建設の爲めに

農村の疲弊、國民道德の頹廢、危險思想の蔓延、擧げ來れば我國の現状は極めて深憂に堪へないことのみである。而して之が原因は一にして足らずと雖も、過去六十年の間西洋模倣に終始一貫したことが、其の根本原因をなしたものと云はねばならぬ。

歐洲に於て驚くべき發展を遂げた新文化は所謂黄金萬能の物質文化であつて、資本主義組織の下に其の暴威を逞うした所の産業專制の文化である。我國が西洋の文物制度を模倣する事に依て新文化を建設したとするならば、我國の新文化が物質文化に偏したのは當然のことである。而して我國の憂ふべき世相は、取りも直ほさず、斯くの如き黄金萬能の物質文化に其の源を發してゐるのだ。

十九世紀は歐洲に於ける工業發展の時代で、物質文化の程度が進めば進む程、又黄金萬能主義が高潮さるればさるゝ程、農業の如き創造的の産業は不利益の立場に置かれ、都會中心の物質文化が益々發達し、土地を根據とした農村中心の精神文化は愈々衰頹を見るに至つた。またそれと同時に機械の發明、科學の進歩に依り從來の家庭工業が工場組織に變じ、資本的となり、組織的となり、其の規模は益々廣大を加へ、一面労働者の需要を増加する事になつたけれども、反面に於ては人力に代へるに機械力を以てすることゝなつた。その結果、局部的には著しく労働者の需要を減じ、失業者は續出し社會の不安は一層大を加へ、爲めに労働者の團結を促し、労働運動を生み、社會主義、共產主義等の發生を見るに至つた。

産業組織の資本的となり機械的となるに従つて雇主と労働者との間柄は、從來の徒弟制度を一蹴し去つて、人間と人間との直接の交渉はその跡を斷ち、金と云ふ中間物に依つて連絡せらるゝことになつた。従つて人間味が薄らぎ温情主義は地を拂ひ、雇主と労働者との間は益々疎隔し、人間を商品化し、冷やかなること鉛の如く、唯だ經濟上の利害を主とした功利的關係の他は其處に人間としての血もなければ涙もない、殺風景極まるものにな

つて了つた。これが最近歐洲を風靡した産業主義の經濟組織發展の結果であつて實に物質文化の一大缺陷である。

自分は此の際想ひ起こす一つのエピソードを持つてゐる。それは明治四十四年の夏、スカンヂナビヤ旅行の折の事であつた。或晩ノールウエーの首府クリスチヤニヤの一ホテルの食堂でコーヒーを啜り乍ら繪はがきを認めて居ると、隣席に居た一外人が色々話し掛けるので、段々話を進めて行つて見ると、この男は露西亞人で、日露の戦役に浦鹽艦隊に屬したグロンゾオキ號の乗組員として従軍した水兵の古手である事が分つた。彼は「日露大戦中に於て最も愉快なりし想出は對島海峡で日本の運送船常陸丸を撃沈した時のことである、戦争は武装なき運送船を襲撃するに限る」とさも愉快さうに談じてゐた。此の自慢話を聞いて自分は、彼等が武士の情を露ほども知らぬ残忍非道の間人である事を痛感せざるを得なかつた。苟くも武士として戦場に出る程の者が武装なき運送船を撃沈して愉快を感じるとは何事だ、是れ全く武士の情を知らぬ言ひ草ではないか。

之に引較べて、上村艦隊が當時浦鹽艦隊を撃沈した場合に於けるその處置の立派であつたことはいふまでもない。上村提督は敵兵が海に浮いてゐるのを見て「敵を殺すのみが戦争の目的ではない、戦闘方を失つた敵兵は一人でも多く救へよ」と命じた。斯くて溺れんとしつゝあつた敵兵の多くは我水兵の手に依つて救はれた。其後佐藤參謀（現海軍中將佐藤鐵太郎氏）は捕虜收容所を見廻つたが、場内が騒々しいので如何したのかと聞いて見た。すると我が水兵達は「此奴等は本統に憎い奴等です、併し斯うなれば可哀さうなものです、武士は相身互ひですから出来るだけ慰めてやらねばなりません」と云つた。之を聞いた佐藤參謀は「それでこそ眞に日本の武士である」と云ひながら感極まつて男泣きに泣いたと云ふ事である。かの武装なき一運送船常陸丸を撃沈して快哉を叫ぶ露國水兵と、海に溺れんとする多くの敵兵を救へと命じた上村提督、捕虜に憐愍の情を傾けた日本の水兵、更に此の有様を見て感泣せる佐藤參謀とを比較して見る時、我々は日露兩國國民の性情の上に驚くべき懸隔のある事を痛感せざるを得ない。

武士の情を知らぬ歐洲人の性情は過ぐる世界大戦に於て、更に／＼極端に暴露された。固より血もな涙もない之等の残酷性は彼等本來の特性でもあるが、特に物質文化の發達に

伴ひ、近年更に幾段の濃度を加へたものであると見るのが至當であらう。

産業主義の弊は更に進んで苟くもそれが利益になるものであれば、人類厚生のためには役立つものが立つまいがそんな事は一切考慮する事なく、その結果直接我々の生活に何等の効果なき贅澤品或は虚榮心を満足するに足るべき寶石類の生産等に従事する事になつて來た。而かもその結果擧げられた利益の多くは資本家の獨占に歸し、之に従事せる労働者には極めて薄い。即ち現在歐洲の社會は専ら資本家の爲に作られてゐるのではないかとの感なきを得ない。

自分は先年ロンドン滞在中、寶石商の軒を連らねてゐるボンド・ストリートを見物に行つた事がある。一個の價格何千金と云ふ高價なダイヤモンド入りの指輪、腕輪其他様々の裝飾品が店頭狭ましと竝べられてゐる。而かも之等の店を訪ねて來る人々を注意して見てゐると、その多くは神と共に清く正しく精神界に生きんとする人々に非ずして、惡魔に引きずられ乍ら本能的に墮落した有閑階級の妻女に非ずんば娼婦の類である。寶石を購ふ人は萬金を借しますして之を投ずるが、之に依つて利益を占むる者は主として商人である。

而かもその寶石商でも又之を購うて虚榮に耽つてゐる女達でも、誰一人として酷熱瘴癘の 아프리카や南洋熱帯の奥地で凡ゆる辛苦を嘗めつゝ寶石の掘出しに従事してゐる労働者の身の上を考へて感謝の意を表する者はない。憐れむべき彼等労働者は辛うじて生活をなし得るに過ぎぬ位な薄給に甘んじつゝ寶石の掘出しに従事し、時には寶石よりも貴い生命迄も犠牲に供してゐるではないか。

自分は曾て臺北在任中、炎熱焼くが如き八月の眞晝時、總督府を出でゝの歸るさ、六十餘歳ともおぼしき一人の苦力が、荷車に水を滿載して曳き行くのに出遇つた。水と云へばその名を聞いた丈けでも涼さを感じる。然るに此の老苦力の額からは豆の様な玉の汗がポタリ／＼と落ちてゐた。そして彼の顔は火の如く眞赤に熱してゐた。我々の要求する冷い水でさへ、其の裏面には斯うした熱い汗の努力が潜んでゐる事を眼前に見た時、自分はその老苦力に心から感謝の意を表した事を今猶ほ記憶してゐる。

曾て水戸烈公は農夫の像を作り、之を御膳の上に置き、御自分は固より、子女に至る迄食事の度び毎に先づ初穂を像に供へる事にせられた。之が有名な烈公の『農人形』である。

之は公が『朝な夕な飯食ふ毎に忘れじな恵まぬ民に恵まるゝ身は』と詠ぜられた様に、實に稼穡の困難を忘れず、且つ百姓達の辛苦に對する感謝の意を表はされたものである。猶ほ烈公は『古くより賢君は民を見る事尙ほ慈母の赤子に於けるが如しと云へり、されど我は少しく之に異りて百姓をば我が乳母なりと思ふ、我は百姓に向つて何等の憐みを施さざれど、百姓は我のためには命を繼なくべきものを與へり、其の恩や乳母と何ぞ選ぶ所のあらんや』と稱し、百姓禮讃の意を盡くされてゐる。

次に自分が幼少の頃祖父からよく聞かされた話がある。それは自分の舊藩主島津齊彬公の事であつたと思ふが、或日便所の傍に落ちてゐた一粒の米を見られて『たつた一粒の米と雖も百姓達の粒々辛苦の汗の滴である、粗末にしてはならぬ』と云ひ乍ら自らそれを拾ひとられたと云ふ事だ。薩、隅、日三州七十五萬石の大守にとつて米一粒が何であらう。而かも便所の傍に落ちてゐた一粒の米を自ら拾はれたのは、唯だ民に對する感謝の心の發露である。此の感謝の心あつてこそ始めて民の心を得られたと稱すべきであらう。

齊彬公が『民ならで誰かは我を養はん養ふ民を養はし使ふな』と歌はれたのも、また民に對する公の美しき感謝の心の表現ではないか。

水戸烈公と云ひ、齊彬公と云ひ、何れも民に對する感謝の心を以つて政治の要道とせられたが、そこに明君たるの實がある。現在資本家にも斯くの如き感謝の心を以て常に勞働者に對すると云ふ事であれば問題はないのであるけれども、現代は實に感謝のない社會である。現今多數資本家の眼中には金以外には何物もなく『黄金は世界を支配す』と云ふオランダの諺の信者のみ徒に多く、『人情は黄金よりも好ましい』と云つた詩人ゴールドスマスの進言には幾んど耳を傾ける者がない。従つてかの淨瑠璃本にある『金より大切な忠兵衛さん科人にしたも皆私故』と歎いた遊女梅川の純な心の本統に解かる様な人間は滅多にない。唯だ自分の賣り出す物が金にさへなれば、人間社會が腐敗しようと、勞働者が困窮しようと、又罪人が出ようと、そんな事は一切顧慮しない。『有用』を捨て、只管『價值』に趨りつゝあるのが西洋物質文化の現状であり、物の所有者消費者が幅を利かして物の生産者が常に踏みつけられ、富者は益々富み、貧者は愈々貧すると云ふのが現代文化の世相である。

世界大戦前印度の詩聖タゴールは我が東京帝國大學に於ける講演に際し『東洋文化は宛かも自然を友として自ら働らく農民の如きものである、従つて一見甚だ質實に見えるけれども其の生命は永遠である。之に反して西洋文化は宛かも自動車を驅つて街路を疾走しつゝあるが如く一見車上の紳士は威勢隆々たるの感がある。然し乍ら自動車のガソリンは聽て盡くるの時がある。其時車上の紳士が來つて救ひを求むる所のは野に立てる農民の他に何者もない。而かもそのガソリンの盡くる時期は既に近づいた』と斷言した。偶然にもタゴールの此の豫言は的中した。西洋の物質文化は凡ゆる缺陷を暴露して遂に世界の大戦となり、其の終熄と共にガソリンは切れて了つて、今や車上の紳士たる西洋文化は圃上の農民たる東洋文化の救ひを求めざるを得ない秋となつた。東洋文化は精神的で宛かも農業の如きものである。資本主義の經濟組織の下に永い間片隅に押し込められてゐた農業は復活して當に榮えんとするの機運に際會し、精神文化の建設に努力すべき眞活動時期は到來したのである。タゴールは『西洋の文化は石造の都市から出發し、東洋の文化は森林生活から出立す』と稱した。

更に世界大戦中『西洋の没落』と云ふ本を書いた例のスペングラは『農民は永遠の間であり、都市に巢喰ふ一切の文化より獨立せるものである、彼は都市に先立つてあり、且つ都市なきの後も存す』と云つてゐる。即ち今や都市中心の物質文化は衰頹し、農村中心の精神文化復興の秋が來たと云はなねばならぬ。永遠なる農業に非ざれば永遠に人類を幸福にする力はない。故に精神文化の建設は一に農村振興に依つてのみ達成せられる。農民の働らくべき新時代は正に到來した。農村青年の活躍すべき新戰場は吾人の前に展開せられた。

既に述べたるが如く我國は數十年來盛んに西洋の文化を輸入した。併し我國固有の文化と新來の文化とは未だ全く混和してゐない。従つて我國の新文化は未だ完全に出來上つてゐない。然るに今や物質文化は徒らに其の弊のみ現はれ、我國獨特のものゝやうに思はれてゐた『武士の情』も段々影を潜め、國民精神は著しく弛緩し、利那的享樂主義に日を送つて、所謂精神文化の著しく薄らぎつゝある事は全國民の等しく戒心しなければならぬ所である。

物質の方面に於ては今猶ほ遙かに歐米諸國に及ばないのが我國の真相である。而かも徒にその弊害のみを學んで成金氣分が隨所に横溢し、政治界も産業界も單り黄金が幅を利かしてをると云ふ事は最も悲しむべき現象であつて、爲に精神文化の中心であるべき農村が益々疲弊し、一種の社會運動が地方農村に迄も波及して小作爭議等益々深刻に進みつゝあると云ふのが今日の實狀である。

農村の振興そのものが精神文化建設の第一歩であると云ふならば、何をさし措いても此の重大なる問題の解決に努力しなければならない。併し乍ら其の原動力となるものは何と云つても農村自體であり、農民その人でなければならぬ。而して我々の主張する精神文化建設の原動力は虚榮婦人の指に輝やくダイヤモンドの光に非ずして、我々お互ひの胸に潜める心の光であり、成金のポケットにジャラついて居る黄金の力に非ずして、我々の全身に充滿し切つたところの人格の力である。心の光と人格の力、これが精神文化建設の二大原動力でなくて何であらう。

自分は先日足利の機織工場を視察した。その際、或工場の女工寄宿舎に掲げられたポスターに『ダイヤの光よりは肉體の美』と云ふのがあつたが、眞にその通りである。堅實なる體力を養ひ、人格の命ずるがまゝに額に汗し、腕の力を一杯に發揮して、而して人間としての天職を竭くし、社會奉仕を完うする所に我々はダイヤモンドの光よりも尊い心の光を發見するのである。我々の進まんとする向上の大道には決して終點はない。此の信念の下に農村青年が全力を擧げて自己の運命を開拓し農村振興の爲に努力するならば、我國を物質文化の餘弊から匡救し、精神文化の建設を完成する事が出来るであらう。

農村の青年諸君、耳を聳て、天空に鳴り響くあの曉鐘を聞け、農村を中心とした精神文化建設の警鐘は既に鳴り始めてゐるではないか。

歩 き な が ら

或夏の日の夕方、自宅から六本木の本屋までぶら／＼歩きをして見た。先づ筈町の電車停留所から、線路に添うて霞町の交叉點に出て、直に右に折れて坂を上る。

左側通行の御ふれにはもとるが、電車道を横切るのが面倒だから、そのまゝ右側を歩いて見る。『市内一圓』と書いた『圓タク』が、ひつきりなしに坂を下りて来る。それが殊の外うるさいので、今度は線路を踏み切つて左側を歩いて見た。併し自動車のうるさいことには少しも變りがない。たゞ變つた點は、前から來た自動車が、後から來ることになつただけのことだ。

自動車で思ひ起すことがある。それは今から二十年も前のことだ。當時獨逸留學中の自分は或日マゲデブルグ附近の一農村に甜菜糖業の視察を試みた。折から盛んに砂煙を立てながら、まつしぐらに驅つて來た一臺の自動車が、いやといふ程、自分達に黄塵を浴びせかけた。『乗つて氣持のよいもの、乗られて氣持の悪いもの！』これがそのとき、自分の感じた自動車觀であつた。

それは田舎道のことであつたから、我慢も出來たが、東京の眞只中で、無遠慮に泥をはねかけらるゝのは確に癢だ。雨の降る日には『泥よけ』を取り付けるのが規則だといふ。法律規則の好きな日本のことだから、それもよからう。併しその前に、雨の中も『泥よけ』なしに駆け得るやうに、路面を完成するのが先決問題ではなからうか。堂々たる西洋館は建てゝ見たが、靴のまゝの昇降は一切まかりならぬといふのが、近代日本の模倣的新文化の眞相である。一事が萬事、もう少しその基礎から手を着ける工夫はないものか。

『乗つて氣持のよいものだ』と思つてゐた自動車に就て、自分はその後、まことに恐ろしい體驗をした。それは大正十四年の十二月、補缺選舉應援の爲め、中國の或地方に出かけた折のことである。演説會を終へての歸るさ、時雨降る夜道を驅つてゐた自分達の自動車が一寸餘の斷崖から、川の中へ眞逆様に墜落した。一時は重傷の如く新聞に傳へられ、各

方面に少からぬ心配をかけたが、幸に自分は微傷だもせず、他の諸君もたいした負傷ではなかつた。併しこの遭難により『自動車は乗つて氣持のよいものだ』といふ日頃の感念がすつかり裏切られてしまつた。

この遭難から無事に歸ることの出来た自分は、家内や小供達に向つて『生命がけで働くのが政治家の使命なんだから、お前達も日頃その覺悟が必要だ』と説いた。……『あなたが立派な政治家として、爆弾の犠牲にでもなつたといふなら、それは本望です。併し僅か代議士一人の補缺選挙に、ポロ自動車と心中して、あなたの貴い生命を捨てたんでは、あきらめがつきませぬ、』家内はかう答へた。……成程さうだ、清く正しく強き理想の政治を我國に確立すべく、自分達の生命は飽くまでも大切にしなければならぬ。誰がポロ自動車と心中などするものか。

それにしても憂ふべきは、我國政治の現状ではないか。『黄金は世界を支配す』といふ唯物的な和蘭の諺を、そのまゝ守り本尊にしてゐるのではないかと思はるゝ様な政治家達によつて、我國の政界は、益々腐敗墮落のドン底に導かれつゝある。

金で身賣をする政治家、賣る者も悪いが、買ふ者は更に悪い。而もこの醜き取引を平氣で觀てゐる一般國民は尙ほ更ら罪が深い。金だ、金だ、金だ！ 黄金の前には選挙も、議會も、國民も、國家も、名譽も何もあつたものではない。斯くて我國の立憲政治は歩歩魔道に落ち込んで行くのだ。

我國最近の政治は、惡魔にひきづられた、黄金萬能の醜き政治だ。そこに自分達は、政治の天國を見出し得ずして、政治の地獄を發見する。『政治地獄』！ 何といふ恐ろしい名だらう。……我國の政治が、このまゝコースを更めずに進むならば『日本の將來』は、果してどうなるであらう。

立憲政治は責任政治である。『一蓮托生』は政黨内閣にとり世界共通の標語だ。而も責任感念に乏しい近頃の政治家は、この大切なスローガンまでも、すつかり忘れ果てゝゐるではないか。尤も一生を托すべき蓮の花は極樂にこそ咲け、地獄には咲かぬ。従つて蓮なき地獄の夜道を歩き廻つてゐる政治家の標語が『一蓮托生』であり得る筈もない。さうだ、彼等の新標語は一蓮托生ならぬ『一圓タクシー』なんだからたまらない。

近頃流行の『圓タク』が街頭をうろついてゐるのは、うるさくもあるが、貧乏な自分達にとつては頗る便利だ。併し大切な一國の政治を預つてゐる政黨内閣が『一蓮托生』をかなぐり棄て、安上りの『一圓タクシー』を當てどもなく乗り廻す様になつては、もう世の中は末だ。

『地獄の沙汰も金次第』黄金萬能の人達にとつて『地獄の世界』はないかも知れぬ。併し彼等が『一圓タクシー』を無意識に乗り廻してゐる『政治道』は『泥よけ』なしには驅けることの出来ない程の悪路だ。而もそれは『天國への道』にあらずして、實に『地獄への道』だ。彼等の乗り込んだ泥まみれの『圓タク』は安物の悲しさ、はやくも、ヘッド・ライトに故障を生じてゐる。さなきだに、眞暗な地獄への夜道を、當てどもなく酔どれの様な格好で、驅つてゐるヘッド・ライトの消えた『圓タク』！ たゞ闇を破つて、かすかに聽ゆるのは力の抜けたガソリンの爆音。而もそのガソリンさへ、どうやら切れかゝつてゐる様な氣色がする。

『我國の政治を惡魔の手から奪つて、之を神の手に返せ！』これが昭和維新の政治的標語でなくてはならぬ。

自分は歩きながら、こんなことを次から次に思ひ出したり、考へたりして見た。さうして自動車に轆かれることもなく、無事に六本木の交叉點までやつて來た。丁度その時、自轉車に乗つた一人の小僧が『止』の標示に目も呉れず、警戒線を突破せんとしたので、交通整理の巡查にしたゝか油を取られてゐた。自分は嘗て見たロンドンの立派な交通整理と、この不規律な有様とを思ひくらべて、情けない様な氣がした。この悲しむべき社會相は、我國の將來が、尙ほ前途遼遠であることを物語るものではなからうか。自分はさう考へながら聽て目的の本屋へ這入り込んだ。

日本の將來を想像して、何となく心のさびしさを感じながら自分は店頭をあちこちと探し廻つた。さうして偶然にも田中文學博士の『日本民族の將來』といふ本が目についた。即ち一冊求めて歸り途を急いだ。日本民族の將來！ このまゝ進んで行つたなら、日本民族の將來は、果してどうなるだらう。

祖國を救ふの道

政黨政治は失敗であると云ふ叫びが、今や全世界を通じて聞えるのであるが、特に我國に於ける政黨政治の甚だ深憂に堪へないもののあることを遺憾に思ふ。

海外に於ては、單に政黨政治が失敗なりと叫ばるゝばかりでなく、其の實際に於ても既に議會政治否認の獨裁政治が到る處に實現しつゝある。

かの伊太利に於けるムツソリーニ氏の政治の如きは其の適例である。その政治の實際に就ては幾多非難すべき點はある。併し従來の議會政治が無氣力なりしに反し、共產主義の政治家によつて國家を危ふくせんとした國難を完全に匡救して、新伊太利建設に向つて、その愛國的熱情を傾倒し、着々その成績を擧げつゝあるの一點に就ては吾人の大いに敬意を表するところである。

併しながら我國に於ては飽くまでも、明治天皇の御聖旨を奉戴し、獨裁政治を排撃し、八千萬國民の總意に基くところの政黨政治の理想的精華を收むべきである。然るに今や徒にその弊害のみ頻出し、院の内外を問はず、凡ゆる醜體を暴露しつゝあるが如きは、實に國家の前途に對して、大いなる暗影を投じつゝあるものと云はねばならぬ。今にして全國民自ら覺醒して、この行詰を打開するに非ずんば、我國に於ても議會否認の叫びは益々烈しくなりゆくことであらう。

故に、若し今日の議會政治に國民の信頼を繋ぐものがないとしたならば、國民は唯だ徒らに之を批判し、之を排撃することなく、自ら進んでこれが改善の方策を講じ、全國民の愛國的熱情を傾倒して、立憲政治有終の美を擧げるの努力がなければならぬ。

議會政治の基礎をなすものは政黨である。故に議會政治今日の實狀は政黨そのものゝ反映であることは云ふまでもない。議會政治の刷新は、政黨の改善に依つてのみその目的を達成することが出来る。こゝに於てか今日の急務は既成政黨改善の一途あるのみだ。

我國に於ける各政黨の實狀は、今更こゝに喋々を要しないが、一言以て之を評するなら

ば、昭和維新の大業を達成せんとするには、餘りに舊式であり、餘りに固陋であり、餘りに窮屈であり、餘りに醜惡である。而して斯くの如き政黨の墮落は、今日の我國の政黨界に英雄なく、偉人なく、天才なき結果である。

民衆政治即ちデモクラシーが、唯だ單に大衆の雜然たる集團であるが如く考へ、その間一人の英雄だに必要なしと考へるが如きは、眞に民衆政治の何物たるかを理解しない者の錯覺と云はねばならぬ。眞の民衆政治は英雄的偉人が大衆の間に伍し、之を指導し之を指揮するに於て、始めて秩序あり、理想ある大衆政治が遺憾なく行はれるのである。

政黨政治の自家とも云ふべき英國の政黨史を繙くならば、明かにその眞相を理解することが出来る。或は大宰相ピットの如き、或はデズレリーの如き、或はグラッドストーンの如き、夫々その人物に特色こそあれ、何れも英雄的素質を具有したところの大天才であり大偉人であつた。而かも彼等の時代が英國に於て最も華々しい政黨政治の時代であつたことを考へるとき、如何に民衆を基礎としたところの政黨政治が、英雄、偉人の指導に依て偉大なる効果を擧げ得るものであるかを了解することが出来よう。否な英雄なく、偉人な

き民衆政治は、理想なき衆愚政治に墮するものであることは寧ろ當然であつて、我國に於ける最近の政治的墮落は、前述の如く、英雄的天才、偉人が影を潜めてゐる結果であることを斷言して憚らない。

古今東西の歴史の示すところに依れば、國家非常の場合には常に偉人の出現を見てゐる。而して熱烈火の如き憂國の意氣を有するところの多くの青年が、斯くの如き指導的偉人の指揮を受くることに依て、始めて國家の大業は達成されたのである。

伊太利統一の大事業が、カプール及びガリバルディーの如き英雄に依て導かれたるが如き、或は獨逸帝國の建設に當て、ビスマルクの如き偉人に依て指導されたるが如き、又我國に於ける明治維新の大業が、西郷南洲の如き大人格者、その他の偉人に依て、その根幹をなされたるが如き、皆その軌を一にしてゐる。

最近我國に於て、政治國難、經濟國難、思想國難等、幾多の國難來が叫ばれてゐるが、何れも之等の國難は、先づ政黨政治の根本的革新を基調として、之が匡救の大業を達成しなければならぬ。而してそれには先づ政黨そのものゝ根本的改造が必要であるが、併し政

黨の革新改造は、非常の決心を以て斷行するにあらずんば、到底達成し得べきものではない。即ち國家非常の場合に際し、非常の大業を成すの意氣と熱心とを具有する大政治家でなければ、到底達成することの出来ない大事業である。大衆の心を心とし、飽くまでも國家國民を目標として、常に公明正大なる政治を行はんとする英雄的素質を保有する大人格者が、一大決心を以て世上の毀譽褒貶を無視し、その初心を斷行することに依てのみ初めて達成し得られるのが政黨そのもの、根本的革新だ。

政治は理論に出發して實際に進むべきものである。理論に囚はれた机上の空論は政治の實際に何等益するところはない。

併しながら、理想なき政治は、所謂衆愚の政治に墮するものであつて、これ亦吾人の贊同し得ないところのものである。天は高い、併し立憲政治は常に天よりも高き理想を目標として進まなければならぬ。そこに我々は神意を表現すべき立派な政治の出現を見ることが出来るのである。

若しこの大理想なきに於ては、その政治は黄金萬能、權力萬能の醜惡なる政治に墮落し、國民は惡魔に引きずられて、地獄に墜ち込むより他に途なきに到るであらう。即ち我國最近の政治界の實狀は、宛かも斯くの如きものではないか。

英雄なく、偉人なく、理想なき黄金萬能の醜き地獄の世界が、現在の日本に暴露されてゐることに想ひ及んだならば、將來の日本、明日の日本を双肩に擔つて立つべき一大使命を有するところの青年諸君が、唯だ徒らに時勢の潮流を打ち眺めつゝ、流れるが儘に之を放棄しておくが如きは、眞にその一大使命を冒瀆するものと云はねばならぬ。茲に於てか吾人は青年諸君の奮起を要望せざるを得ない。

青年諸君の熱烈火の如き愛國の至情は、總てのものを焼き盡くさずんば已まない筈だ。その猛火を以て今日の憂ふべき世相の凡てを焼き盡し、そこに昭和の新日本を建設しようではないか。

吾人は天よりも高き理想を目標として進まなければならぬ。併しながら繰り返して言ふが、政治は實際である。我々が天よりも高き理想を畫きつゝ進む場合に、我々の兩脚が地上を離るゝとしたならば、我々の人間としての力は失はれるのだ。故に我々は常に大地

を強く踏み締めながら、天よりも高き理想を目標として進まねばならぬ。

立憲政治の目標は彌や高く尊いものでなければならぬ。即ち政治は常に神意を我等の地上に實現することではなければならぬ。而して此の神意の實現、政治の理想化は、一に青年諸君の奮起に俟たなければならぬ。

明治維新の大業を達成したる我等の先輩は何れも直情徑行の青年のみであつた。

見よ！ 更生支那は青年の手に依て華々しく門出せんとしつゝあるではないか。

滿天下の青年諸君！ 諸君が一度び奮然として起つ時、余は第二の南洲先生が諸君の間から出現すべきを信じて疑はない。而して第二の南洲出づるに及んで、始めて政治の理想は實現せられ、昭和維新の大業も達成せらるゝであらう。

— 昭和三・二二 —

世界的偉人を造れ

世界を歩いて見ると、何れの國でもその國を代表するところの、世界的大人物を持つてゐる。或は政治家として或は學者として、或は文豪として或は軍人として、その種類は異つてもその國を代表する世界的偉人たるの點に於ては何等異るところがない。

而も國民は口を極めて、自國を代表するところの、世界的大人物を禮讚し、推賞して已まない。即ちその人物に多少の缺陷があるとしても、その缺陷は之を蔽ひ隠して、たゞ特長のみを讚美し、國民舉つてその人物を益々大ならしめんことに努力してゐる。

自分は之等各國の世界的大人物を、一々批判して見ようとは思はぬが、自分が最も永く在留してゐた獨逸に就いて之を考へて見ても、ビスマークの如き、或はゲーテの如き、獨逸全國民が世界的大人物として、口を極めて讚美してゐる人々である。元來人間が神でな

い以上、何人も缺點を有するものであるが、ゲーテの如きも世界的大文豪であり偉人でありながら、その素行に就いては非難すべき多くの缺點を持つてゐたことは否み得ない事實である。若しゲーテが日本に生れてゐたとしたならば、彼は夙に葬られて迎も世界的偉人たるに至らなかつたかも知れない。

而も獨逸の國民が之等の缺點を蔽ひ隠して、彼を殆んど世界に於て類例なき大文豪として、大人物として誇りつゝあることは、吾々の大いに考慮して見るべき點である。ゲーテの今日の名聲は固より彼自身の力によつたことは云ふ迄もない。併し同時に獨逸國民が口を極めて彼を讚美し、國民の手によつて彼を世界的大人物に造り上げたものであるといつてもよい。

併しこれは獨り獨逸に限つたことでなく、或はフランスに於けるナポレオン、或はアメリカに於けるワシントン、或はイギリスに於けるグラッドストーン等何れも彼等を世界的大人物たらしめた裏面には、かうした全國民の大なる努力のあることを忘れてはならぬ。

然るに我國の實情を顧みて之を歴史上の人物に求めた場合に、世界的偉人として我等の禮讚に値する人物は決して少くない。けれども事實に於てナポレオン、或はビスマルク、或はゲーテ等の名が世界の隅々にまで鳴り響き、又人類の凡ゆる階級の間に行き互つてゐるのに比すれば到底お話にならぬ位であつて、此の意味に於て日本に世界的偉人なしといふも敢て過言ではない。

但し之は我國に眞に世界的偉人のないのではなく、たゞ吾々國民に世界的偉人を造り出すだけの努力なく、雅量なき結果である。之を實際に就いて考へて見ても、我國に於ては如何なる人物と雖も、評判のよい期間は極めて短い。大政治家だ、大教育家だ、大人物だと讃へられたその翌日には、早くも同じ國民の口から悪罵を浴びせかけられるといふ事實は餘りにも多いことである。世界的大人物を我國に於て造り出すことの出来ない原因は、即ちそこにあるのだ。

今や我國は世界の一等国であり、英米と共に三大強國の一つだと稱せられてゐる。然るに人物に就ていへば、世界に誇るべき大偉人は殆んど見當らない。即ちこの點に於て我國は依然として悲しむべき『一寸坊の國』だ。

我々日本人の第一の缺點は、佛教の所謂「行」と「煩悶」に捉はれることの多い點である。即ち羨やみ、嫉み、怨みの性の特に強いことである。人の榮達を羨やみ、嫉み而して遂には之を怨む。斯くて我が國民には世界的偉人を造り上げるだけの努力もなければ、雅量もない結果に陥るのだ。

若し之がために我國に世界的偉人たるべき人物が生れてゐながら、その實世界的偉人になり得ないといふならば、吾々は何を差し措いても先づ國民の此の大きな缺點を排除し、凡ゆる方面に世界に誇るべき大人物を造り出すことに全力を挙げなければならぬ。

たゞ茲に、吾々が意を強うするに足るべきことは、現在に於て吾々が一個の世界的偉人を我國に所有することである。それは實に吾々の郷里鹿兒島の生んだ東郷元帥その人である。即ち東郷元帥の名は今や世界の隅々まで、同時に凡ゆる階級の間にも鳴り響いてゐる。特に自分は東郷元帥と姓を同じうしてゐる關係から、世界到る處に於て元帥の名が遍ねく行き亘つてゐることを知るの機會が多かつた。自分はそのために非常な利益を受けたこともあり、或は大いに面目を施したこともあり、或は又大へん迷惑をしたこともあり、

到る處に多くのエピソードを残して來た。いまそれを一々茲に開陳する餘裕を持たないけれども、就中その一つを擧げて見よう。

明治四十四年の夏休暇を利用して、當時ベルリン大學在學中の自分は、スカンチナピヤ地方の旅行を試みた。或朝ストックホルムのホテルで朝飯の卓に就いてゐると、一人の新聞記者が訪ねて來た。そして「君は日本から來た東郷だといへば定めてアドミラル東郷の身内の者であらう」と切り言ふ。何等の關係がないことをいくら辯明しても、却々承知せず、彼は飽迄も自分を東郷元帥の身内の者ときめこんでしまつて、いろ／＼の話を進めて行つた。さうして「君はベルリン大學で何を専ら研究してゐるか」との質問に對して「國家學に關する方面の研究をやつてゐる」旨を答へると、記者は重ねて「それでは君は政治家になるつもりか」と問ひかけた。さうして「或は政治家になるかも知れない」といふ自分の答へを聞くや、彼は「君が政治家になつたらアドミラル東郷が大提督として世界に名を轟かしたやうに、君は大政治家として世界に名聲を博するの日はあるだらう」とお世辭を浴びせかけた。そこで自分も負けずに「然り今後二三十年にして我が日本に東郷といふ

大政治家が現はれた場合には、それは吾輩であるからよく記憶して置き給へ」と冗談をいって、終には大笑ひをしながら、件の記者と別れてクリスチアナに發つたことがあつた。

かうした例は到る處にあることである。而も世界の凡ての人が自分を東郷元帥と結びつけて、何とかして敬意を表したいと苦心してゐる此の事實は何を物語るであらうか。言ふ迄もなく之は全く東郷元帥が世界的偉人としての値打ちを、立派に具へてゐる結果であつて、期せずしてその名が世界に鳴り響き、各國民、各階級の人々の尊崇の的となつてゐる事實の證據であると謂はねばならぬ。

吾々が世界的偉人を造り出し得ない悲しみを持つ間に、獨り東郷元帥を有することは、日本國民としての誇りであり、殊に薩南健兒として、絶大の歡びと誇りとを感じる次第である。

我々は現在に於ても、將來に於ても斯くの如き世界的偉人は飽迄も之を禮讚し、飽迄も之を支持して國家の誇りとし至寶としなければならぬ。而も此の誇りを永遠に維持することが日本の國家をして益々世界に重からしめ、我々日本人をしていよ／＼世界に偉大なら

しむる所以なりと信ずる。

併しながら、吾々は東郷元帥一人で満足する譯には行かない。第二、第三幾多の世界的偉人を造り出すことに努めなければならぬ。然らば如何にして偉人を造り出すべきか。自分信ずる『如何に偉人たるの素質を具へてゐても、周圍がその人を支持せず、環境がその素質をよりよく培養しない限り、その人は可惜世界的偉人たるべき素質を具へながら遂に世に現はるゝの機會なき』ことを。故に吾々は先づ郷土的に人物を養成し、之を日本的たらしめ、遂にそれを世界的たらしむべく大に努力しなくてはならぬ。

吾々薩南健兒の特色は所謂舉國一致の美風にある。明治維新の大業を吾々の先輩が達成し得たのは、全く此の美風の然らしめたところである。故に吾々薩南健兒から此の美風を取り去つた場合、そこに一體何物が残るであらう？ 西南戦争が我が薩隅の天地に如何なる打撃を與へたかを考へて見るとき、統一の絲の切れたる悲しみを痛切に感ずるではないか。

昭和維新の大業完成の必要が高唱力説さるゝ今日、吾々は飽迄も吾々の持つ傳統的美風

を發揮しなければならぬ。前にも述べた通り吾々は神でない以上、人間としての缺點を有するのが當然である。而もその缺點だらけの人間の中から、吾々の中心となるべき人物を選び出して、協力一致その特長を益々發揮せしめ、その人物を愈々大ならしめ、茲に薩隅を代表すべき人物を造り上げ、更にその人をして日本を代表すべき大人物たらしめ、尙ほ進んでは、世界的大人物として國家の誇りとなすに足るべき成果を見るに至るべき大努力、その大努力を衷心より熱望して已まない次第である。

—昭和四・一—

政界革新の爲めに

神まつる心を常の心にて

政治の庭を淨めてしがな

この歌は私がこの度びの御大典に召されて諸般の御儀式に參列するの光榮を有し、嚴肅なる神祀を仰いで、思はず自分の心の中に浮び出でた心持を歌つて見たのである。無論歌としては極めて平凡であり、且つ拙劣ではあるけれども、その氣分に到つては自分自身の氣持をその儘に表現した積りである。

過去六十年間を通じて、西洋模倣の文化に終始一貫したところの日本の現状は一面驚嘆に値する程の大進歩をなし得たけれども、其の反面に於ては憂ふべき幾多の事象を發見せざるを得ない。

かの十九世紀以來、驚ろくべき發展を遂げた西洋の文化は、所謂物質文化であり、黄金萬能の本能的文化であつた。

この西洋文化を一も二もなく模倣追隨したのが、現代の我國の文化であると云ふならば、今日の我國の文化そのものは同じく物質文化であり、忌まはしき黄金萬能の文化でなければならぬ。

此の黄金萬能の傾向は、我國文化の進展に伴れ益々熾烈となり、殊に最近に於ては到るところにその露骨なる表現をなしてゐる様であるが、この悲しむべき現象は實に西洋の物質文化模倣の餘弊に外ならないのである。

今や我國は上下を通じて、この物質文化に惱まされ、その黄金萬能の弊に堪へないものがある。これがために人心は輕薄に流れ、質實剛健の氣風は地を拂つて見る影もない實狀である。

この切實な現れが我國の政治界に無遠慮に侵入して來たといふことは、特に國家將來のため深憂に堪へないところである。

政治は力なりと云ふ言葉があるが、無論力なくしては政治は出來ない。

併しながら、政治に用ひらるゝところの力そのものに謬があつたならば、その結果は政治の腐敗墮落を來たすことになる。即ち今日に於ける我國の政治の墮落は、全く謬まれる力の濫使の結果であると云はなければならぬ。

我國最近數ヶ年の政治界を無遠慮に批評するならば、権力と金力とが思ふ儘にその暴威を逞うしたところの政治であると云つてよからう。

過ぐる昭和三年の二月に行はれた普通選舉！ 眞に我等國民にとつて紀念すべき第一回の總選舉が、舊態依然として金力と権力との支配するところとなつたが如きを見ては、全國民に對して、何處に政治思想の進歩發達の跡があるか？ 如何にして國民の政治的自覺の存在を見出だし得らるゝか？ と叫ばざるを得ない。

更に政治家の最も尊ぶべき節操が、殆んど白晝公然と金錢に依つて賣買取引せらるゝ現狀にまで墮落したことは果して何事を物語つてゐるのだ？ 而して政治家を斯くまでに墮落せしめたところの本源は果して何人の罪に歸すべきであらうか。

節操を賣物にする政治家は無論排撃しなければならない。而してこれを購ふ政治家に到つては更に憎むべきものではないか。而もこの醜汚なる取引を平然として眺めてゐる一般國民の無關心な態度に至りては、より以上の罪惡と云はなければならぬ。

黄金の前には選舉も、議會も、國民も、國家も、名譽も何もあつたものではなく、今や我國の立憲政治は歩一步と魔道に墜ち込んで行きつゝあるのだ。

我國最近の政治は惡魔に引きずられた黄金萬能の醜き政治であつて、我々は其處に政治の天國を見出し得ずして、寧ろ政治の地獄を發見する。

政治地獄！これが我國今日の政治の真相を説明するに最も適はしい言葉であることに我々が氣付いた時、我々は今こそ國家の爲めに一大覺醒をしなければならぬ秋であるとの感を深くするものである。

故に我々は我國の政治を惡魔の手から奪つて之を神の手に還し、惡魔に依つて汚された我國の政治を神の手に依つて洗ひ淨めるために奮起しなければならぬ。而して我々の理想たる政治の天國を建設することが昭和維新の大業でなければならぬ。而も斯くの如き大業

の達成は、一に純眞水の如く、熱烈火の如き青年諸君の力に俟たなければならぬ。

自分は政治界の一員として、常に自分の力の足らざることを恥ぢてゐる。併し乍ら自分は、速かに我國から黄金萬能の醜惡なる政治を排除し、之に換ふるに人格政治を以てし、神と共に清く、美しく、正しく、強く生きんとする人格政治の確立を期せんと欲して止まないものである。

自分は常にこの心持を以て政界に處せんとするものであるが、偶々御大禮の諸儀に參列するの光榮を有し、畏多いことではあるが、聖天子御親ら嚴かに神まつりまします御有様を仰ぎ奉つて、こゝに始めて我國政治の根元が發してゐるのであるといふことを痛切に感じた次第である。

即ち政事は祭事であつて、神を祭るの心を以て政事を行ふのである。そこに始めて眞の政治といふものが生れ出づるのだと自分は考へる。所謂祭政一致、これが我國の本體であると云はなければならぬ。恐らく御大禮の諸儀に參列するの光榮を有した諸員の凡てが、あの場合に於ては悉く邪念を捨て、眞に神の如き心を抱きながらあの尊い光景を仰ぎ見た

に違ひない。

茲に於てか自分は總ての國民、就中政治家に對して新らしく要求しなければならぬことは、西洋模倣の物質文化から速に覺醒し、我國固有の精神文化に蘇へり、黄金萬能の政治を排撃し、神を祭るの心を常の心として、腐敗墮落の極に達した我國の政界を革正し、清らかな政治の庭に立つて、眞に意義ある政治を我國に確立しなければならぬといふことである。而も斯くの如き政界の革正は一に青年の奮起に俟つより他に道がないのである。然れば我國の政界革正にとつては、青年の奮起そのものが今日の最大急務であると云はなければならぬ。

自分は典禮の諸儀に參列して、特に此の點に就て感を深くしたものである。希くは滿天下の同憂青年諸君の賛同を獲、昭和維新の大業を達成する日の近からんことを。

—昭和四・二—

農村の青年とその娛樂修養

古今東西の歴史を緝いて見ると、農村の盛衰は直ちにその國の盛衰を支配するものであつて、甚しきは内國農業の頽廢が國家を衰滅に導いた實例さへ尠くない。

故に國家の興隆を永遠に期し、國民生活の向上發展を期せんが爲めには、飽くまでも農業の發展、農村の振興を計らなければならぬ。

農村の振興策は言ふまでもなく二三にして足りないけれども、その根本の方針としては次の三つを擧げることが出来る。

- 一、ペター、フアーミング
- 二、ペター、ビジネス
- 三、ペター、リヴィング

即ち第一は農業の技術的方面をよりよくすることであり、第二は農業の經營乃至經濟方面をよりよくすることであり、第三は農村の生活をよりよくすることである。

農業の發展、農村の振興を期する上に於いて、農業の技術の方面から之が改善作振を期することは勿論である。

最近の我國の農業は、此の方面に於いて、特に著しい進歩を遂げたと言つてよからう。併しながら、第二の經營の方面乃至經濟方面に就ては、猶ほ遺憾の點が非常に多いと言はなければならない。

如何に技術の方面が發達して農業の生産力が増進したとしても、それが經濟的に算盤に合はないと言つた様なものであれば、農業の企業的價値は零と云はなければならない。

故に我國の農村を發展せしめようとするには、一層此の方面に向つて努力しなければならない。

斯くの如く、農業の技術的方面に於ては、大いに發展進歩して、農業經營の方面も、一大進歩を遂げたとしても、猶ほそれだけでは満足することが出来ない。

單に農業の經營が收支償ふと云ふだけの程度であつたならば、農村の積極的發展と云ふものは期待することは出来ない。農村の生活と云ふものが、單に働いて食つてゆけるだけであると云ふ程度のものであるならば、經濟思想の發達した今日の社會に於いて、徒らに祖先傳來の家業を繼いで、貧乏生活に満足するものがあり得る筈がない。

茲に於いてか、一歩進んで、農村の振興を期せんとするならば、農村の生活をよりよくしなければならぬ。即ち農民の生活を向上發展せしめて、人間として、社會人として、國民として、他の階級に屬する人々と變りのないやうな良い生活にまで、之を導いて行くといふ點にまで行かなければ、到底農村の繁榮は期せられない。

農村のよりよき生活、即ち農村生活の向上を期するには、大體、次の二つの重要な問題がある。

第一には農村の娛樂の問題であり、第二には農村に於ける人々の修養の問題である。

西洋の物質文化を模倣した我國最近の文化は、所謂、資本主義の經濟組織の下に、商工業の發展を促進し、同時に、都會中心主義の文化が發達して來た。

従つて都會に於ける各種の文化的施設は、非常なる發達を爲して、精神的にも、物質的にも、都會生活は、目醒ましい向上發展を遂げたと云はなければならぬ。

茲に於てか、商工業の發達進歩は喜ぶべきであらうが、同時にその反面に於いては、地方農村の疲弊、農業の行き詰りを見るに至り農村の生活は極めて寂寞を感じるに至り、都會生活に比して、農村生活は著しい、遜色を來たすことゝなつた。

即ち、一言以つて我國の農村生活を批評するならば、實に娛樂なき生活なりと云ひ得る。世間には働らかすして娛樂のみに耽る人々も尠くないが、彼等は國家を衰滅に導く以外何事をもなし得ない國民である。併し、これと同時に、一切の娛樂を抜きにして、たゞ働くことのみを没頭する生活は、同じく、國家を隆盛に導く所以ではない。

茲に於てか、現時、世界各國、何れの農村に於いても、娛樂の必要を痛感し、夫々適宜の施設をなすに汲々としてゐる。

我國に於いても、古來何れの地方に於いても、其の地方獨特の俚謡あり、舞踊あり、しかも之等の娛樂には、單に夫々の地方色を表現するばかりでなく、深い意味を藏してゐる。

然るに、明治初年この方、西洋文明の模倣に終始一貫して來た我邦の教育は、斯くの如き古い傳統を有する郷土的誇りをも一掃して了つて、現今では見る影もない。

茲に於いてか、我國の農村は娛樂なき農村に一變して、寂寞無味なること、沙漠の如き感を抱かしむるに到つた。

農村青年の教育は進み、經濟的思想の向上に伴つて、よりよき生活を求め、娛樂多き都市生活に憧れるといふことは、自然の趨勢と云はなければならぬ。

最近農村の青年男女が、農村を見捨て、都會に走るものが漸次其の數を増して來るが、その最大原因は實に此處に在りと云はなければならぬ。

曾て繁榮隆盛を極めてをつたローマ帝國の農村が荒廢に歸して、遂にローマ滅亡の原因をなすに到つたのも、娛樂なき農村の青年が、ローマ市の娛樂多き都會生活に憧れて、農村を顧みなかつた結果である。

若し我國の農村が今日の儘で進むならば、遠からずローマ帝國の二の舞を演じないと誰が保證し得ようぞ。

故に我々は、農村に於ける娛樂機關の適當なる施設を要望して止まない。

偶々、活動寫眞等が農村を賑はすこともないではないが、その映畫は却つて農村の青年處女をして、農村の生活を嫌はしめるに至る誘因となるものばかりである。

故に目下の急務は農村に適はしき映畫を作成すると同時に、古來の俚謡、舞踊等の復活を促進することではなければならぬ。

斯くて農村の生活は、楽しい生活に一步を進め、所謂、よりよき生活を營むことが出来るであらう。

併しながら、自分の云ふところのよりよき生活といふのは、單に娛樂の施設のみに限らない。我々の生活は單に娛樂の充實のみを以て甘んずべきものではなく、更に進んで修養ある生活にまで到達しなければならぬ。

今日の農村は常に娛樂なき生活であるばかりでなく、實に亦、修養なき生活に終始してゐると云はなければならぬ。

農村の教育は、徒らに智識の詰め込みのみに力を盡くし、人間として、社會人として、國民としての精神的修養の方面に於て、著しく缺けたところがある。この人格的訓練を輕視したところの農村の教育の結果が、一面に於ては、農村疲弊の眞因をなしてゐると云はなければならぬ。

北歐の一小國デンマークが、最近四五十年間に於て、理想の農業國を建設し、農民の天國を完成して、農村文化の誇を世界に示しつつある原因は、全く教育の結果であると云はれてゐる。

殊に男女青年を教育する國民高等學校の根本方針が、人間を造るといふことにあつて、人格的修養を目標とした教育を行つてゐる結果であることを思ふ時、如何に農村青年の修養が、農村の盛衰を支配するものであるかを會得することが出来る。

故に何を差し措いても、農村の振興をなすには、先づ農村教育を根本的に革新して、農村青年の精神的修養に向つて、主力を盡くさねばならぬ。

斯くて娛樂ある生活は、一步進んで修養ある生活に進み、我々の期待するところの農村のよりよき生活と云ふものが實現せられることになる。

單に學校教育の方針を人格修養に置くだけでなく、學校に離れたものでも、精神修養の自由に出来るような設備を必要とする。

故に歐米農村に於いて、發達してゐる農村文庫、田園圖書館等と云つた様なものを、成るべく實質的に完成して、青年自ら修養の過程を辿り得るやうな計畫も一つの方法と云はなければならぬ。

更に農村の青年が、精神的修養に進むべき第一歩として、自己の有する使命を明瞭に自覺するといふことが必要であると思ふ。

それは寧ろ農業に関する知識の修得でなく農業が人生にとつて必要な所以、更に農村が國家の基礎をなすべきものであると云ふ信念を明瞭に意識し、而して地方農村の青年としては、何を差し置いても、此の尊い農業を保全し、この貴重な農村を發展せしむると云ふことが、自己の大使命であるといふ堅き信念を培はなければならない。

そこに一つの大哲學が生れ出で、始めて農村の青年としての、立派な精神的修養も完成せられると云はなければならぬ。

斯くて農村の青年諸君が、農村に於いてよりよき生活を楽しむことが出来るやうになつたならば、今日の憂ふべき農民離村の現象も自から緩和せられ、元氣潑刺たる青年の手に依つて農村は維持せられ、こゝに始めて農村中心の精神文化の建設を見るに至り、眞の農村振興の宿望を達成することが出来るであらう。

財部から東京まで

財部から東京まで、汽車で行けるやうになつた。このうれしさに會うて、過去を顧みれば、たゞ夢の様である。

自分が郷里財部の小學校をへ、父に連れられて東都遊學の途に上つたのは、明治二十七年、實に十四の春五月であつた。財部から福山までは、下男に馬をひかせ、その馬背にまたがつたといへば、如何にも立派に聽こえるが、その實、落馬を防ぐために、この身はしつかり鞍上にくよりつけられながら、五里の道を馬で運ばれたといふに過ぎない。

福山から鹿兒島まで小蒸汽に揺られ、更に鹿兒島からは、四百噸足らずの汽船にこの身を託し、二晝夜にして神戸に着いた。こゝで初めて電燈を見た。カンテラとランプの外見たことのない田舎者には、それさへ驚異の一つであつた。

神戸で初めて汽車を見、初めて汽車に乗つた。すばらしく速いものだと考へ、驚きの眼を見張りながら、熱心に窓外を見詰めてゐたことを、今もなほよく記憶してゐる。

東京から従兄の山城彦熊が、神戸まで迎ひに来て呉れたので、父は大阪で下車して國へ歸つた。別れののぞみ、父は車中で自分の頭を撫でながら『しつかり勉強して立派な人間になれ』といつた。さうして父の目は涙に光つてゐた。

その頃は、東海道にも、まだ急行列車はなかつた。従つて東京までは、かなりの時間を要した。父に別れて汽車の初旅、子供心にも人知れぬ淋しさを感じた。さうして『しつかり勉強して、立派な人間になれ。』といつた、父の言葉を時々思ひ出しながら、その翌日の午前に、漸く東京の人となつた。

考へて見ると、それはもう三十五年も前のことである。併し郷里の先輩達が國都線の實現に熱心に努力せられたのは、それよりもすつと古いことで、恐らく四十年も前からのことであらう。而も今や多年の希望漸く達成せられて、その一部財部都城間の鐵道が開通することになつたのは、何といつても喜ばしいことである。今は故人となられた幾多の先輩